



国際交流  
記録文集  
International Exchange Record

2025

# 目次

『国際交流記録文集』第17号 発刊に寄せて	奈良学園大学 社会・国際連携センター長 伊藤 健一	
『国際交流が育む学びの広がり』 学長の挨拶	奈良学園大学 学長 金山 憲正	1

## 夏期日本語研修プログラム

「研修レポート」 蘇州科技大学 研修生		
厲 鈴 張 韻潔 張 皓然 張 淵 李 紫慧 周 怡静 唐 荣溪	.....	2
「研修レポート」 台湾国立屏東科技大学 研修生		
洪 上喻 張 語芳 魏 苙嫻 江 宜軒 陳 品瑄 于 驊麟 劉 家安 陳 有朋 梁 鈞祐 鄭 詒鏞 吳 秉秝	.....	9

## 東アジア文化交流研修

「東アジア文化交流研修レポート」 特別聴講生 郭 鄧豪	.....	20
「東アジア文化交流研修レポート」 特別聴講生 許 姝婷	.....	21
「東アジア文化交流研修レポート」 特別聴講生 徐 吉超	.....	22
「東アジア文化交流研修レポート」 特別聴講生 趙 銘航	.....	23
「東アジア文化交流研修レポート」 特別聴講生 張 力源	.....	24
「東アジア文化交流研修レポート」 特別聴講生 劉 佳寧	.....	25
「東アジア文化交流研修レポート」 特別聴講生 梁 潤生	.....	26

## 【国際看護論演習】 IN 台湾

「演習レポート」 看護学科	喜左上 るい 田中 奈菜 新島 瑞生 山口 蒼元 安達 爽那 井上 彩華 川村 花佳	
小西 陽佳 高村 恋那 東口 心葉 宮川 芙実	.....	27

## 台湾文化交流研修

「令和7年度 台湾文化交流研修を実施して」	人間教育学部 准教授 山田 明広	33
「2026年 台湾文化交流研修実録」	人間教育學院 副教授 山田 明廣	34
「台湾文化交流研修から学んだこと」	人間教育学部 2411220 吉村 陽葉	35
「台湾文化交流研修を終えての学び」	人間教育学部 2411211 永田 ほのか	36
「台湾研修で学んだこと」	人間教育学部 2411223 大久保 ひなた	37
「台湾文化交流研修レポート」	人間教育学部 2511512 松室 賢大	38
「台湾文化交流研修レポート」	人間教育学部 2511505 佐名木 麗	39
「台湾研修で得た学びとコミュニケーションの重要性」	保健医療学部 2531142 森島 羽子	40
「台湾文化交流研修レポート—台湾研修を通して学んだ異文化交流と多様な学び—」	保健医療学部 2531101 東 咲希	41
「台湾文化交流研修レポート」	保健医療学部 2531202 安宅 杏里彩	42
「台湾の研修で学んだこと」	保健医療学部 2531201 青柳 美来	43

## 特別聴講生プログラム【課題研究発表PPT】

「中国と日本の保健医療の特徴」	<b>PPT</b> 黒龍江東方学院 許 姝婷	44
「東野圭吾『悪意』の人物描写」	<b>PPT</b> 黒龍江東方学院 劉 佳寧	47
「中国の儼文化の日本への伝播と発展」	<b>PPT</b> 黒龍江東方学院 梁 潤生	49

編集後記	保健医療学部 講師 笹野 弘美	51
------	-----------------	----

## 「国際交流記録文集」第17号 発刊に寄せて

本学の国際交流事業の歩みを一冊の記録としてまとめた「国際交流記録文集」を刊行するにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。本年度は、予期せぬ計画変更に直面し、社会・国際連携センターとしても試練の多い一年となりました。しかし、そうした困難を一つひとつ乗り越え、実りある学びの場を維持し続けられたことは、我々にとって大きな自信となりました。

まず「夏期日本語研修プログラム」では、蘇州科技大学と屏東科技大学からの学生を本学に迎えました。奈良・京都での講義やフィールドワークを通じ、学生たちは日本の伝統に息づく「細部へのこだわり」が、文化や倫理観に通じていることを肌で感じ取っていました。対面交流の再開により、言葉を超えて「同じ空間を共有する」ことの重みを再確認する機会となりました。

次に「東アジア文化交流研修」では、特別聴講生たちが沖縄で琉球王国の歴史を学びました。琉球大学での講義や首里城の見学を通じ、かつて「万国津梁」として栄えた歩みに触れる過程は、学生たちが自国を多角的な視点から見つめ直す貴重な時間となりました。

三つ目の「国際看護論演習」は、今年度最も運営に腐心したプログラムです。セブ島研修の断念という苦渋の決断を経て、台湾の美和科技大学での演習を実現できたことは大きな成果でした。現地の「安全性と家族の絆」を重んじるケアやAI管理システムを目の当たりにした経験は、自国の「当たり前」を疑う、看護職としての不可欠な糧となるでしょう。

また、四つ目の「台湾文化交流研修」では、屏東科技大学と美和科技大学の協力のもと、現地の教育・医療・福祉機関において知見を広めることができました。異なる社会システムの中で機能する専門施設を実際に訪れ、その運営に触れたことは、学生にとって自身の専門性を再考する機会となりました。

さらに「特別聴講生プログラム」による黒龍江東方学院からの留学生との日常的な交流は、キャンパス内に多様な価値観を受け入れる土壌を育ててくれました。

今年度は運営面での課題が山積しておりましたが、それゆえに、一つひとつのプログラムを無事に遂行し、学生たちを現地の空気に触れさせることの重みを痛感いたしました。国際交流とは、必ずしも立派な志を持って臨むものばかりではありません。用意された環境に身を置き、普段とは違う景色や人の中に身を投じること。その経験そのものが、後にそれぞれの糧になると信じております。

結びに、プログラムの実施にご尽力いただいた国内外の関係各位に深く感謝を申し上げます。本文集が、次年度以降のさらなる交流の発展に向けた礎となることを願っております。

奈良学園大学 社会・国際連携センター長  
保健医療学部 教授 伊藤 健一





## 国際交流が育む学びの広がり

奈良学園大学 学長 金山 憲正

海外の大学から来日する学生に対しまして奈良学園大学では「夏期日本語研修」「東アジア文化交流研修」「特別聴講生」の各プログラムが用意され、本年度も参加した学生さんから満足度の高い研修であったとの評価を得ることができました。「夏期日本語研修」には蘇州科技大学、国立屏東科技大学、黒龍江東方学院、メコン大学からの学生さんが3週間の研修に参加し、そのレポート11編が本文集に収録されています。どの学生さんのレポートも研修期間が3週間とは思えない程充実した内容になっていることに驚かされています。「東アジア文化交流研修」と「特別聴講生」プログラムの参加者は、蘇州科技大学、黒龍江東方学院からの計4名でどちらのプログラムも同じ学生さんの参加となっています。「特別聴講生」の学生さんは約1年の研修期間中に「東アジア文化交流研修」にも参加いたしました。この4名の学生さんは約1年の滞在中に日本各地を訪問したり自分で開拓したアルバイトで日本人の仲間と交わったりと日本の生活文化と積極的に触れることにも挑戦していました。その結果、「相手の気持ちを考えて行動する」ことの大切さが理解でき、それが身につけてきたと笑顔で語る姿が印象に残りました。

一方、本学から海外へ出かける研修としましては、「セブ島語学研修」と「台湾文化交流研修」のプログラムが実施されました。「セブ島語学研修」は4週間

の間「英語漬けの毎日」を体験する研修でコロナパンデミックの期間を除いて継続実施されており、本年も実施することができました。また、「台湾文化交流研修」は本年度からの新しい取組として、本学学生の人間力育成とグローバルマインドを醸成することを目的として企画されたものです。具体的には海外協定校の一つである台湾の国立屏東科技大学での英語交流会や屏東県内の教育機関・医療機関・文化施設等でのエクスカージョンを通して、いろいろな文化を幅広く感じる活動が主な内容となっています。今回が初めての企画であったにも関わらず、屏東科技大学や美和科技大学のご配慮や学生さん達の協力に支えられて本研修を大変充実したものとすることができました。

その他にも本学と蘇州科技大学をオンラインで結んでお互いの大学がPPTでの発表を交換し合う形での文化交流会も実施することができ、その内容も先の研修と同様本文集に収録されています。

最後になりましたが、本学での研修プログラム並びに本学からの海外研修の企画立案にご尽力頂きました社会・国際連携センターの皆様、研究指導や宿泊の引率など本事業推進に多方面にわたりご協力頂きました教職員の皆様に心から感謝すると共に厚くお礼申し上げます。



## 研修レポート

蘇州科技大学 厲錚

大学2年生で日本語を専攻しておりますが、この夏休みに日本の奈良学園大学が主催する日本語研修プログラムに参加する貴重な機会をいただきました。数週間にわたる研修を通して、日本語能力の向上だけでなく、日本文化への理解も深まり、「教室の外で学ぶこと」の大切さを実感いたしました。

奈良学園大学の授業は非常に充実しており、文法・語彙・会話などの基礎的な内容に加えて、特にリスニングとスピーキング能力の向上に重点が置かれていました。授業では、グループディスカッションやロールプレイなどの実践的な活動が多く、日常会話からフォーマルな場面での敬語表現まで、幅広く練習することができました。

最初のうちは、話す速度の速さや語彙の不足に戸惑うこともありましたが、先生方の丁寧なご指導とクラスメートの励ましのおかげで、次第に自信を持って話せるようになりました。実際の場面で自分の考えを日本語で伝えられたときには、大きな達成感を覚えました。特に敬語の使い方を学んだことで、日本の方々より自然で礼儀正しく会話ができるようになり、教室での学びと現実の生活がつながっていることを実感いたしました。

奈良学園大学では、授業のほかにも多彩な文化体験活動が用意されており、どれも印象に残るものでした。奈良は古い歴史と豊かな文化を持つ街であり、一つひとつの外出がまるで生きた文化の授業のようでした。

私たちは東大寺や春日大社などの世界文化遺産を見学し、奈良の大仏の壮大さと古都の落ち着いた雰囲気感動いたしました。ガイドの方の説明を通して、奈良が日本仏教の発展において果たした重要な役割を知り、日本人が自然や神仏に対して抱く深い敬意を感じ取りました。

また、和菓子作りや茶道体験、書道の授業にも参加いたしました。これらの体験では、日本文化の繊細さや「和」

の精神を肌で感じることができました。特に茶道では、ひとつひとつの動作に礼節と調和が込められていることを学び、書道では「心静かならば筆穏やかなり」という感覚を体験的に理解いたしました。こうした活動を通して、日本の伝統文化に宿る精神や美意識を深く理解することができました。

日本の学生の方々との交流も、今回の研修の大きな魅力の一つでした。交流会では、互いの出身地の風習や食文化を紹介し合い、学習方法や将来の夢について語り合いました。そうした会話を通して、言葉は単なるコミュニケーションの手段ではなく、異なる文化をつなぐ架け橋であることを実感いたしました。

また、日本の学生は協調性を非常に重視していると感じ、その姿勢からチームワークにおける責任感や他者への配慮の大切さを学びました。文化の違いを理解しながらも、お互いに共感し合える瞬間が多く、非常に有意義な経験となりました。

今回の研修で最も大きな収穫は、自分の学習の方向性をより明確にできたことです。これまでは教科書中心の学びに偏りがちでしたが、奈良での実践的な学習を通して、言語は実際の場面で使うことで初めて生きた知識になると強く感じました。さらに、文化体験を通じて、言語を学ぶということは、語彙や文法を覚えるだけでなく、その背後にある価値観や思考のあり方を理解することでもあると気づきました。

短い期間ではありましたが、この奈良学園大学での日本語研修は、私の大学生活の中でも特に貴重な思い出となりました。日本語能力の向上はもちろんのこと、日本文化への尊敬と関心が一層深まりました。今後はさらに視野を広げ、学んだ言葉と知識を生かして、日中両国の文化をつなぐ架け橋の一人となれるよう努力してまいりたいと思います。

## 研修レポート

蘇州科技大学 張叡潔

3週間の日本研修旅行は、まるでやさしい夢のようで、目が覚めると、持ち帰った記念品だけでなく、心いっぱいぬくもりある思い出が荷物に詰まっていました。重々しいけれど、軽やかでいつも振り返りたくなるものです。

奈良学園大学と、私たちに思いやりを与えてくれたすべての先生方に、心から感謝したいです。到着時の丁寧な迎え、毎日のレッスンの入念な計画、授業中の私たちのやや生々しい日本語の質問に対する忍耐強い解答、授業後の地元の生活の細かい注意事項の伝え方まで、ホテルの手配から、便利な靴を履くことや、好みの食材が買える場所のアドバイスまで、彼らの世話は春の暖かい日差しのように、灼熱することはなく、十分に暖かく、初めて異国に来た私たち学生は、引っ込み思案を捨て、この土地の風土人情に心を込めて浸ることができました。

この3週間の時間は、まるでアクセルが踏まれたように過ぎていきましたが、すべての細部がはっきりとしていました。日本語能力の向上は最も目に見える収穫で、最初は食事を注文するときもつまづきながら、後には地元の人たちと天気や旅行のエピソードを話すことができるようになり、その言葉によるつながりを通して、「コミュニケーション」という言葉の重みを実感しました。そして、もっとも貴重なのは、浴衣体験で感じた繊細さです。先生が手を取って帯結び方や折り方を教えてくれ、着る瞬間、まるで呼吸にも日本美学のやさしさが滲み出ていました。茶道体験では、茶師が茶の淹れ方を教えてくれ、畳の上の軽やかな足音を聞きながら、その一杯のお茶には、苦味と甘みだけでなく、「一期一会」の重みと落ち着きが感じられました。これらの体験は本の文字ではなく、触れることのできる布の質感、嗅ぐことのできる茶の香り、感じることのできる儀式感で、私たちは本当に日本文化の温もりに触れることができました。

一緒に旅行した仲間たちは、この旅の中で最も輝く存在でした。異なる都市から来た私たちは、日本文化への好奇心と愛情で集まりました。昼は、未知の街の道を並んで歩き、道標の日本語をわいわいと推測し、夜は、寮の畳の上に詰め込まれて、一日の出来事を話し合い、お互いの小さなミスを笑いながら愚痴りました。着物を着る体験で帯を「ニワトリ巻き」にしてしまった人や、初めて刺身を食ぶるときに目を閉じていた人もいましたし、卒業式で一緒に

日本語で歌を歌い、目に輝きを持っていたことも覚えています。これらの共通の瞬間が、私たちが知らない人から知り合いに、秘密を共有し、励まし合う友達に変えました。この文化を通じて結ばれた友情は、とても貴重です。

今、研修は終わりましたが、心の中の感動はますます深まっています。以前は「文化」という言葉は大きくて遠いものだと思っていましたが、この3週間の経験で、文化は決して本の上の冷たい概念ではなく、街のあたりの生活感、人と人が接するときの真摯さと善意、異なる背景を持つ人が出会ったときの、お互いを理解しようとする気持ちであることがわかりました。それは先生が差し出した一杯の温かい飲み物の中に、地域の人々の暖かいあいさつの中に、仲間たちとの目と目が合ったときの默契の中に隠されています。

この旅は、心に日本語へのもっと深い愛情の種をまき、理解を促進したいという願いを植えました。将来は、もっと一生懸命に日本語を勉強したいです。流暢な日本語を話せるようになるためだけでなく、いつか小さな架け橋になり、日本で感じた暖かさと善意を伝え、中国の物語をもっと多くの人に語りたと思っています。

最後に、奈良学園大学のすべての先生方、私たちに助けを与えてくれたすべての地元の人たち、一緒に旅行したすべての仲間たちに、改めて感謝します。この3週間の時間は、大切に保管されたフィルムのように、すべてのコマが輝いており、長い間記憶に残ります。





# 研修レポート

蘇州科技大学 張皓然

## 一、研修の基本概要

今回の研修は奈良学園大学で実施され、期間は21日間で、核心内容は「日本文化の深度な研究と学習」でした。研修期間中、毎日校内で日本の現地教員、台湾屏東科技大学及び蘇州科技大学の学生と一緒に授業を受け、地域を超えた交流を通じて日本の伝統文化と現代文化の流れを体系的に学びました。課外時間には奈良公園、東大寺、福寿園を訪れるほか、同級生たちと大阪へ一日旅行に行き、大阪ユニバーサル・スタジオ(USJ)を巡りました。其中、福寿園では抹茶体験をしました。授業中の異校間文化交流と東大寺の木造建築構造の観察が、土工学専攻の本科生としての私にとって、文化認知と専門関連を両立させる今回の研修の核心内容となりました。

## 二、研修の核心内容と体験

### (一) 授業での学習：言語学習を通じた異校間の文化共感

授業は今回の研修の核心シーンで、「日本語応用+日本文化」を二つの主軸とし、奈良学院大学の教員が「シチュエーション別教授+グループワーク」の方式で行いました。専門知識の議論は行われませんでした。異校の学生たちが一緒に参与することで、生き生きとした「地域文化の衝突と融合」の場になりました。

日本語の授業では「日常シチュエーションでの会話」を中心に、「コンビニでの買い物」「交通機関の利用」から「伝統文化体験」まで、反復練習を通じて表現のロジックを身につけました。最も印象に残っているのは「自己紹介」のセクションです。台湾屏東科技大学の学生は日本語で台湾の「廟会文化」を紹介し、「神輿の巡行」については手を使って動きを表現しました。それをきっかけに、日本の教員が「日本の祭り」と台湾の廟会の異同について展開しました。蘇州科技大学の学生は江南水郷を題材に、日本語で「周荘の石橋と烏篷船」を描写し、さらにクラス全員で「船(ふね)」「橋(はし)」などの日本語単語の発音練習をするように促しました。本来は単なる言語練習だったものが、三地の文化を紹介する小型シェア会に変わりました。

文化の授業は「日本の伝統的な日常生活」を中心に展開され、「茶道の礼儀」「和食文化」から「伝統祝日の習慣」まで、一つ一つのテーマが異校の学生たちの共感を呼び起こし、議論を引き起こしました。「茶道の「一期一会(いちごいちえ)」について話した時、台湾の学生は台湾の「功夫茶」の「ゆっくり浸して細かく味わう」理念を挙げ、「一期一会」の大切にする心は共通していると思うと述べました。蘇州の学生は故郷の「評彈茶座」を思い出し、「評彈を聴きながら碧螺春(へきらんしゅん)を飲むのも、現時点の時間を大切にする一種の方式だ」と話しました。また、「日本語の「お世話になります」の使用シーン」についても交流しました。この言葉は先生への感謝にも、同級生同士の日常のあいさつにも使えることが分かり、「礼儀性と日常性を両立させる」表現を通じて、日本文化の「尊重と親密さのバランス」をより直感的に理解することができました。

21日間の授業では専門知識の議論はありませんでしたが、日本語学習を媒体として、「一語一句、一場面一風景」の中でそれぞれの地域の文化認知をシェアし、日本語の応用力を高めただけでなく、リラックスしたインタラクションを通じて異校の学生たちとの距離を縮め、「言葉は文化の橋である」ことを実感しました。

### (二) 東大寺：伝統木造建築における視覚と専門的な感知

課外考察の重要なポイントである東大寺は、授業の知識と直接的な関連はありませんでしたが、その雄大な木造建築構造は、土工学専攻の私に、無意識のうちに専門的な視点から伝統建築の匠心を捉えさせました。

東大寺の核心建築である「大仏殿」は日本で現存する最大の木造建築で、遠くから眺めると、巨大なクスの柱と梁が重なり重なる屋根を支えており、全体の構造は簡潔でありながら力強さに満ちています。近づいて観察すると、最も衝撃的なのは柱の下部と礎石(いしずえ)の接続方式です。柱の下部は固定されておらず、礎石の上に平らに置かれており、わずかな可動スペースが残されています。この「非剛性接続」は授業で専門的に解説されていませんでしたが、その設計の工夫を直感的に感じ取ることができました。外力が加わった場合、柱はわずかに移動することで力を緩和し、直接断裂するリスクを負うのではなく、現代建築の「柔軟な耐震」の考え方とぼんや

りと呼応しているように感じました。

さらに、大仏殿の「斗拱(とうきょう)」構造も見どころです。一層一層重なる木製部材が互いにかみ合い、重厚な屋根を支えるだけでなく、視覚的に柱と梁の単調さを打ち破っています。土工学の視点から見ると、これは装飾だけでなく「力の伝達媒体」であり、屋根の荷重を均一に柱に分散させ、局部的な過負荷を避けています。具体的なパラメーターまで深く研究していませんが、東大寺が純粋な木材でこれほど巨大な建築体量と構造の安定性を実現していることに、「伝統建築と現代工学のロジックの共通性」についてより直感的な感知を得ました。

## 三、その他の研修体験

### (一) 大阪一日旅行：異校の仲間との都市文化散策

研修の中期に、3人の異校の同級生(屏東科技大学2人、蘇州科技大学1人)と一緒に大阪一日旅行を開始し、奈良駅からJR線に乗って出発し、二つの都市のスタイルの違いを一路感じました。

梅田エリアでは「大阪スカイビル」の下で上を見上げ、ガラスカーテンウォールと鉄骨構造でできた超高層ビルが、奈良の低い伝統的な建築と鮮明な対比をなしていました。道頓堀に来ると、沿道の「グリコサイン」、提灯が下げられた店の軒先、そしてどっと詰まる人々に、大阪の「にぎやかで生き生きとした」市井の雰囲気をもつて感じました。台湾の同級生は笑顔で「台北士林夜市ののにおいとよく似ている」と言い、蘇州の同級生は「蘇州の観前街よりリズム感がある」と感慨しました。私たちは一緒にお好み焼き、たこ焼きを試し、授業で学んだ日本語で店主と簡単に交流しました。言葉はぎこちなかったのですが、達成感に満ちていました。この同行時間を通じて、異校の同級生との関係は「授業の仲間」から「旅行の親友」へと変わりました。

### (二) 大阪ユニバーサル・スタジオ：没入型の楽しみと細部の観察

大阪USJを巡る一日は、研修中で最もリラックスできる時間でした。私たちは一緒に「ハリ・ポッターの魔法の世界」の「フォービドゥン・ジャーニー」を体験し、城の中を移動する際に、ゴシック様式を模した建築の細部に注目せずにはいられませんでした。壁の「石の模様」は実は軽量素材で模造されており、屋根の「尖塔」は鉄骨で支えられています。映画の場面を再現するだけでなく、建築の安全性も考慮されています。「ジュラシック・ワールド」エリアでは、恐竜の模型がレール上を移動するのを見ながら、私は無意識に隠れた支持構造を観察しました。模型の下部は弾性のある接続部品でレールに固定されており、揺れる効果を実現できるだけでなく、安定して荷重を支えられることが分かりました。この「機能と体験を両立させる」設計は、「構造設計はシーンのニーズに応えるべきだ」という根本的なロジックを思い出させました。

そのほか、奈良公園でのシカとの触れ合い、福寿園での抹茶挽きや点前の体験も、今回の研修に豊かなディテールを加えました。特に抹茶作りで「抹茶を挽く時は時計回りに均一な力で」「点前では水温を80℃に制御する」という要求を通じて、日本の伝統工芸における「正確さと集中力」への追求を感じ、この態度は土木工事の施工における「細部が安全を決める」という理念と一致していると思いました。

## 四、研修のまとめと収穫

21日間の奈良研修は、「日本文化と日本語」を核心としていました。言語学習、文化交流、課外体験の中で、予想以上の成長を遂げました。授業では台湾や蘇州の同級生と日本語練習を通じて地域文化をシェアし、単一な視点から抜け出して「同じ根源の文化のもとでの多様な表現」を理解しました。東大寺の木造構造の観察では専門的な議論は行いませんでしたが、より感性的な方法で伝統建築と現代工学のロジックの関連を感知しました。大阪の一日旅行とUSJでの同行は、楽しい思い出を残しただけでなく、異校の友情を授業から日常生活にまで広げました。

今回の経験を通じて、研修の価値は「どんな知識を学ぶか」だけでなく、「オープンな心で違いを感知し、他人とつながること」にあると悟りました。今後、日本語学習、専門分野の探求、人付き合いのいずれにおいても、この地域を超えた多角的な体験は、私の重要な成長の栄養となるでしょう。



# Japanese Study Tour: A Cultural Awakening Through the Senses

蘇州科技大學 張淵

Before this journey, my idea of "cultural experience" was simple—see the sights, learn some facts. But as I stepped into Japan, my senses came alive. The textures, sounds, and flavors wove together, revealing a world far richer than I had imagined—and in doing so, showed me a more attentive version of myself.

## The Art of Wearing Beauty

When I slipped into the yukata, I expected only fabric and knots. Instead, I found reverence. The obi's tight embrace, the precise fold of the collar, the way the cherry blossom patterns bloomed under the sun—each detail whispered of a culture that honors elegance. Our instructor adjusted every millimeter of fabric with care, and no one rushed to take photos. First, we stood still, letting the moment settle. Outside, the streets mirrored this quiet discipline—not a scrap of litter, not a single crooked stone. Cleanliness wasn't a performance; it was a habit, effortless as breathing. Without thinking, I slowed my steps, not wanting to disrupt the harmony.

## Where Wood Meets Light

At Tōdai-ji Temple, the towering wooden beams stole my breath. But what lingered was the dance of old and new: hidden lights illuminating ancient Buddhas, wooden signs etched with crisp modern fonts. Tradition here wasn't locked away—it breathed, adapting without losing its soul. As sunlight spilled through the eaves, painting gold on the Buddha's face, I understood: true culture isn't fragile. Like these timbers, it stands firm yet welcomes change.

## Edo Streets and Hidden Cameras

Kyoto Studio Park blurred time. One moment, I was walking an Edo-era street, greeted by kimono-clad shopkeepers crafting wagashi with centuries-old techniques. Next, I spotted a camera rig—modern technology stitching the past into films. Culture here wasn't a relic; it was alive,

growing. The past didn't fade—it simply made room for new stories.

## The Deer Who Teach Gentleness

In Nara, the deer weren't just animals; they were neighbors. They nuzzled my palm for treats but never fought. No signs shouted "Don't Feed!"—just a simple request: \*Please be kind.\* And so we were. Their soft calls, mingling with summer cicadas, taught me that "cleanliness" isn't just about streets. It's in how we treat each other, and the world we share.

## Rice, Ink, and the Weight of a Moment

Making sushi, I learned precision: rice soaked to the minute, vinegar measured like medicine. The teacher didn't scold my clumsy shaping—she smiled. \*Try this way. Taste the difference?\*

 And when I bit into my roll, the crackle of seaweed, the warmth of rice—it was proof that perfection hides in patience.

At Fushou Garden, calligraphy became meditation. \*Breathe in with the brush's lift,\* the teacher said. \*Breathe out as it falls.\* My first strokes were shaky, eager to impress. But when I let go, the ink flowed truer. The bitterness of matcha faded into sweetness, much like Japan itself: formal at first glance, then unexpectedly tender.

## What I Carried Home

I didn't just bring back souvenirs. I brought back a way of seeing—the quiet pride in a well-tied obi, the grace of deer in a sunlit park, the lesson that slowness isn't wasted time. Now, I notice the way leaves scatter on the pavement, listen more closely to voices, and arrange my breakfast plate with care. Not because I must, but because I've learned: civilization isn't grand. It's folded into small acts, done with intention. And that's a beauty worth preserving.





# Notes from the Land of the Rising Sun: A More Vivid Kind of Learning

## Li Zihui, Suzhou University of Science and Technology

蘇州科技大学 李紫慧

Studying abroad is never merely about acquiring knowledge in the classroom; it is also a profound cultural immersion and self-reshaping. During my studies in Japan, I shuttled between modern cities and thousand-year-old temples, perceiving similarities and differences in the language barrier.

Academic Vision: Language Classes and tea Ceremony experiences

Japanese language courses are undoubtedly the cornerstone of all experiences. In systematic learning, teachers not only teach the language itself but also guide us to understand the cultural logic behind it. From the use of honorifics to the control of tone, I gradually understand that language is the carrier of thought. Learning a new language is like obtaining a key to a new world. It enables me to go beyond the perspective of tourists and try to understand the order and human feelings of Japanese society.

The real "first lesson" took place in the matcha-making workshop of Fushouyuan. Grind tea powder by hand and experience the process of whisking tea with a tea whisk. Every step is precise and rigorous. When the teacher handed me that bowl of emerald green matcha, it was paired with a semi-transparent wagashi. I first took a bite of the wagashi, and the sweetness of the red beans instantly enveloped my taste buds. Take another sip of matcha, and the ultimate bitterness follows. It is amazing that when the two extreme flavors blend in the mouth, the bitterness perfectly balances the sweetness.

Cultural Immersion: Zen Enlightenment from the tip of the tongue to the soul

The cultural experience of Kyoto arranged for us by the Japanese teacher was an aesthetic education that touched the soul directly. At the ryotei beside Nanzenji Temple, a sophisticated "tofu dish" allowed me to appreciate the ultimate pursuit of the original flavor of ingredients in Japanese cuisine. Each dish is minimalist yet by no means simple, embodying a sense of awe for the gifts of nature.

The subsequent meditation experience was even more unforgettable. Sitting quietly in the temple, trying to clear away distractions, I realized how noisy my heart was. Although my legs and feet were numb and sore, in that forced stillness, for the first time, I clearly heard my own breathing and heartbeat. This kind of self-reflection on one's inner self is an unprecedented experience.

The highlight of this trip was the Golden Pavilion. When the "Relic Hall" that I had seen countless times in the images stood before my eyes, and the pool water reflected the pavilion covered with gold foil, at that moment, I understood the concept of "reflection" in Japanese aesthetics. The beauty of the Golden Pavilion lies not only in its own brilliance but also in its harmonious coexistence with the surrounding environment. It is a kind of ultimate fusion of artificiality and nature, a static splendor. It is no longer merely the backdrop of "The Clever Ikkyu", but has become an aesthetic symbol about eternity and the

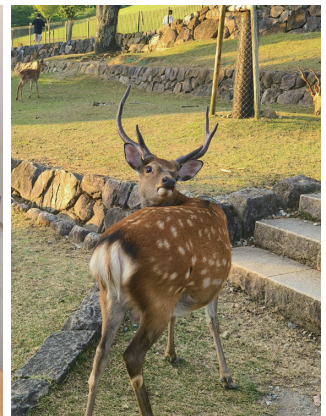
moment.

Nature and Culture: Dancing with deer in the setting sun of the ancient capital

Outside the classroom, the cities and nature in Japan have also taught me a lot. In Osaka, I followed in the footsteps of anime and found a "Conan-style" camera spot in the Castle Park. Modern popular culture and historical relics coexist in a wonderful way. On the Suma Coast of Kobe, my friend and I chased the setting sun in the sea breeze, watching the sun, like a salted egg yolk, slowly sink into the Setonaikai Sea. The world was dyed a golden red. At that moment, what I felt was a pure natural romance that transcended national boundaries.

The most healing time is undoubtedly when one stays in Nara for a long time. It has become a daily routine to keep company with deer after school. At first, their rash behavior of snatching the deer scallops startled me, but later I found that if you have no food in your hand, they will be gentle and at ease, not disturbing you. Climbing up Mount Wakakusa and sitting on the slope of Mie Mie, on one side are deer leisurely grazing, and on the other is the panoramic view of the Nara Basin. The setting sun bathed the entire ancient capital in a warm glow, with only the sound of the wind and the tinkling of deer bells ringing in my ears. In this eternal tranquility, both academic pressure and homesickness are gently soothed. I realize that human beings have always coexisted with all things in nature, and harmonious coexistence is the most beautiful state.

Looking back on my study abroad experience, it has endowed me not only with a diploma of knowledge, but also with a "sensory system" to view the world and approach life anew. I have learned to experience life like savoring matcha - accepting bitterness, appreciating sweetness, and finding balance within it. I have learned to confirm my own existence in the reflection of the world, just like the Golden Pavilion. I have also learned to be like the deer herd under the setting sun in Nara, to coexist gently with the world, at ease and composed. This journey is the most brilliant reflection of my twenties.





## 《A summer time in my life - a study trip in Japan》

蘇州科技大學 周怡靜

Hello, teachers and classmates:

I'm Zhou Yijing from Wuxi, China, currently studying at Suzhou University of Science and Technology. This time, I was fortunate to come to Nara Gakuen University in Japan for research in mid-July 2025. The 21 days in Japan are like a midsummer night's dream, fantastic and romantic. The exotic customs and people make me linger. Next, I will introduce my trip from the three aspects of study, scenery, and friendship.

We are the first batch of students who have no basic knowledge of Japanese, and we were very anxious when we first arrived. Fortunately, the teachers of Nara Gakuen University are very responsible and enthusiastic. Although the all-Japanese teaching class is a little difficult for me, I will still be influenced by the teachers' vivid expressions and body language. Now I can also speak a few simple words of Japanese, and the most important thing is to master the sense of intonation.

I set foot in the three cities of Nara, Osaka, and Kyoto, and saw many buildings with Tang Dynasty architectural styles. Along the way in Kyoto, the mysterious shrine not only preserves the natural scenery, but also cleverly combines it with the people. In Nara, I fed the bowing deer and prayed for love in Kasuga Taisha Shrine. I especially like the atmosphere of the road. It is quiet and peaceful, which is very suitable for walking. Needless to say, the scenery of Osaka is breathtaking. The night view of the bustling city was also breathtaking. It's like I really came to the comic "Detective Conan" and saw the ancient Osaka Castle and the neon-lighted Tongtian Pavilion. If I have a chance in the future, I will definitely go to Tokyo again to see a wider world.

Friendship is my greatest gain in Japan. Seven classmates travelled and went shopping together, and we took care of each other in a foreign country.

The most valuable is the help from the compatriots of Pingtung University of Science and Technology in Taiwan. For difficult problems in the classroom, Bingqi and other students will take the initiative to act as translators. We will discuss the most distinctive scenery and food in our hometown together. In the evening, we will drink and chat together on the second floor, talk about life and imagine the future. I remember that at night in Nanchan Temple, we played games in the room. In my eyes, we were the actors of the same charming group theatre, shining. Especially on a day of playing in Universal Studios Japan with Taiwanese students, every project was very interesting. "Osaka Love" was played at dusk. At that time, we were raising our hands high and falling rapidly in the Dream Tour. I think I will remember it for the rest of my life. Now, I still keep in touch with my best friend Yixuan and often communicate with each other. I wish every student a bright future, peace, and happiness. Welcome to visit me in Wuxi, China!

Finally, I would like to thank every teacher for their dedication and help. You have worked hard. I wish you good health and a successful career. Looking forward to our next meeting.





# A Month of Enrichment in Japan: My Sojourn at Nara Gakuen University

Suzhou University of Science and Technology

Tang Rongxi

My one - month study experience at Nara Gakuen University was an immersive journey filled with cultural discoveries, gastronomic delights, and academic insights. It was a time that allowed me to delve deep into the heart of Japan, a country that seamlessly blends tradition and modernity.

Upon arrival at Nara Gakuen University, I was immediately struck by the warm - heartedness of the Japanese people. The university staff welcomed me with open arms, helping me settle in and introducing me to the campus facilities. The academic environment was vibrant, with classes that covered a wide range of subjects, from Japanese literature to advanced technology. I particularly enjoyed the courses on Japanese calligraphy. Holding a traditional brush and carefully forming characters on the rice paper, I felt a profound connection to the long - standing cultural heritage of Japan. Each stroke was not just a movement of the hand but a gateway to understanding the Japanese way of thinking and aesthetics.

One of the highlights of my trip was the visit to Kobe. Renowned for its world - class Wagyu beef, Kobe offered a culinary experience like no other. As I sat in a cozy restaurant, the waiter presented a beautifully marbled piece of Wagyu. The moment I took a bite, the tender meat melted in my mouth, releasing a rich, buttery flavor. The experience was not just about the taste; it was also about the meticulous preparation and the respect for the ingredients, which are deeply ingrained in Japanese cuisine.

In Nara, the city of deer, I had a chance to interact with these gentle creatures. Walking through Nara Park, I was surrounded by deer that roamed freely. Some would bow their heads, seemingly asking for deer crackers, while others would simply graze in the grass. It was a surreal experience to be so close to nature and to witness the harmonious coexistence between humans and animals in this ancient city.

A trip to Osaka was all about shopping and experiencing the energetic city life. Dotonbori, with its bright neon signs and bustling streets, was a shopper's

paradise. I wandered through the narrow alleys, exploring local shops that sold everything from trendy fashion items to unique handicrafts. The atmosphere was electric, and the enthusiasm of the shopkeepers was contagious. It was here that I got a taste of the modern, fast - paced side of Japan.

Kyoto, the former capital of Japan, was a place of tranquility and timeless beauty. I visited the historic temples and shrines, such as the famous Kinkaku - ji, the Golden Pavilion. The sight of the temple, covered in gold leaf and reflecting in the pond, was simply breathtaking. The gardens surrounding the temples were meticulously designed, with carefully pruned trees, stone paths, and serene ponds, creating a peaceful oasis away from the hustle and bustle of the city.

Back at Nara Gakuen University, I also had the opportunity to participate in cultural activities. I tried on a kimono, a traditional Japanese garment. Putting on the kimono was a complex process, but with the help of the friendly staff, I finally managed to wear it properly. It was a moment of feeling like a part of Japanese history and culture. I also attended tea ceremonies, where I learned about the art of making and serving matcha tea. Every movement in the tea ceremony was precise and meaningful, representing respect, harmony, and purity.

The university also introduced me to Japan's advanced technology. I visited the technology labs on campus, where researchers were working on cutting - edge projects in fields such as robotics and artificial intelligence. It was inspiring to see how Japan was at the forefront of technological innovation while still holding onto its cultural roots.

As my one - month study at Nara Gakuen University came to an end, I felt a deep sense of gratitude. This experience had not only broadened my academic knowledge but also enriched my cultural understanding. I had learned that Japan is a country that respects its past while bravely embracing the future. I will carry the memories of this journey with me forever, and I hope to one day return to this wonderful land to continue my exploration.





## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 洪上喻

今回の日本での夏季研修は、大学生活の中で最も特別な思い出となりました。新しい友人や先生方との出会いは、毎日を楽しく充実したものにしてくれました。

学校では授業だけでなく、キャンパスライフや食堂での昼食も体験しました。また、日本の学生が真剣に学ぶ姿勢を目の当たりにし、大きな刺激を受けました。先生方は丁寧にご指導くださり、私たちにプレッシャーを与えることなく、好きなアニメや前日に訪れた場所など、さまざまなことを気軽に話せるよう導いてくださいました。そのおかげで、私は心を開き、皆と楽しいことを共有することができました。

研修期間中は、奈良や京都の神社やお寺を訪れ、日本文化を深く感じることができました。占いに興

味のある私は、もちろんおみくじを引く体験もしました。幸い「凶」は出ませんでした。もし出ていたら少し落ち込んでいたかもしれません。こうした文化体験を通じて、日本の伝統や特色に触れ、多くの新しい知識を得ることができ、とても嬉しく思います。

日々が終わりに近づくにつれ、まだ言葉にできていない感謝の気持ちが心の中にたくさんあります。この日々の中で、数多くの新しい人や出来事に出会えたことは、私にとってかけがえのない宝物です。皆さんが私の人生に現れてくれたことに改めて感謝し、この思い出の詰まった記念冊子を胸に、次の旅立ちへと向かいます。そして、また皆さんとお会いできる日を心から楽しみにしています。





## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 張語芳

日本に来たとき、私はとても緊張しました。特に、授業の初日に試験と面接があったので、すごく大変でした。でも、奈良学園大学の先生たちはとても優しく、私は自分が知っている単語を使って先生たちと話しました。この三週間で、私は日本語で自己紹介をしたり、故郷を紹介したり、好きなアニメについて話すことを学びました。また、文化体験の授業がとても好きでした。たとえば、たこ焼き作りの体験では、日本のたこ焼きが台湾のものと違って、もっと柔らかくて味もあっさりしていることに気づきました。そして、浴衣を着る体験では、浴衣を着るのは簡単ではないとわかりました。特に印象に残っているのは、京都の南禅寺での体験です。お経を書いていると、心が落ち着くのを感じました。お寺で食べた精進料理もとても美味しかったです。次の日は早く起きて、お経を聞いたり、座禅をしたりして、とても新しい経験ができました。

最終日のグループ発表では、私たちは全て日本語で発表しなければなりませんでしたが、準備時間が少なかったのですが、私とグループのみんなは真剣に取り組む、分担して何度練習しました。発表の時はまだ緊張していましたが、最後にはうまく発表を終え、達成感を感じることができました。

楽しい時間はあっという間に過ぎました。最初は知らないことだらけでしたが、だんだんと慣れてきて、先生やクラスメートと過ごした時間は私にとって大切な思い出です。この研修を通して、問題を自分で解決する力やチームワークを学びました。たとえば、道に迷ったときに積極的に人に道を聞いたり、報告書を作るときにみんなで協力したりしました。この経験は、これからの挑戦に役立つ大切な力になると思います。新しいことに挑戦して、成長し続けたいと思います。

相比於猶豫不決，我更認為應該勇於嘗試未知的事物。非常感謝學校提供此次赴日研修的寶貴機會，期間不僅能與來自不同國家的同學交流文化差異，也一同學習日語，讓我收穫良多。

初到日本時，我感到非常緊張，尤其是上課第一天就必須參加考試與面試。然而，奈良學園大學的老師們都非常親切，我也嘗試用自己會的單字與老師交流。在這三週中，我學會了如何用日語進行自我介紹、介紹家鄉，以及分享自己喜歡的動漫等。此外，我特別喜愛文化體驗課程。例如，章魚燒製作體驗讓我發現日本的章魚燒口感更軟，味道也較清淡，與台灣有所不同；而在浴衣體驗中，我們花費許多時間學習，才理解到穿著浴衣並非易事。其中最令我印象深刻的是在京都南禪寺的體驗，透過抄寫經文，我感受到心境逐漸平靜下來。寺廟提供的素食料理十分美味，隔日還需早起聽誦經與打坐，這些都帶給我全新的體驗。

在最後一天的分組報告中，我們需要以全日文進行發表。雖然準備時間有限，我和組員們依然十分慎重，努力分工合作並反覆練習。即便上台時仍然很緊張，但最後我們成功完成報告，並從中獲得滿滿的成就感。

快樂的時光總是短暫，從最初的陌生到後來的熟悉，與老師及同學相處的點滴都成為珍貴的回憶。在研修過程中，我學會了獨立解決問題與團隊合作，例如迷路時主動尋求路人協助，或在製作報告時彼此分工合作。我相信，這次經驗將成為日後面對挑戰的重要養分，幫助我勇敢嘗試新事物，並從中不斷成長。





## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 魏苙嫻

この夏休みは、私にとってとても充実した時間となりました。私は学校と奈良学園大学が共同で実施した語学研修に参加し、三週間を過ごしました。私にとってこの期間はかなり長く感じられ、特に初めて一人でこれほど長い間海外に滞在した経験となりました。毎日の授業や活動は新しい体験に満ちており、多くの学びと収穫を得ることができました。

授業では、日本語の学習に加え、先生方が日本の文化や生活習慣についても教えてくださいました。時には授業内容が実生活と結びつき、言語を学ぶだけでなく、その背景にある文化深く理解することができました。学習が進むにつれて、私は少しずつ日本語で人と交流することに挑戦するようになりました。たとえ間違えることがあっても、そのやり取りが自信につながったと感じています。

授業以外の時間には、できる限り各地を探索しました。研修先が奈良であったため、まず奈良特有のゆったりとした雰囲気を経験しました。奈良公園の鹿はとも可愛らしく、触れ合ったことは強い印象に残って

います。また、ならまちの小道には独特の風情があり、散策中に会う小さな店や甘味処は、訪れるたびに新しい発見をもたらしてくれました。

週末には大阪や京都にも足を運びました。大阪は非常に活気にあふれ、道頓堀のネオン看板、屋台のたこ焼き、人で賑わう街並みなど、日本の別の一面を感じることができました。それに対して、京都はまた異なる魅力を持っていました。清水寺や錦市場など、寺院や古い町並みには歴史の趣が漂い、日本の伝統文化をより深く理解するきっかけとなりました。

この三週間の研修は単なる語学力の向上にとどまらず、文化や生活を学ぶ貴重な経験となりました。授業、買い物、観光など、さまざまな場面で日本語を練習することで、学びが自然で具体的なものとなりました。この期間に得られた知識、美味しい食べ物、歩いた街並みなどの思い出は、私にとって非常に大切な財産です。今後また機会があれば、このような研修に参加し、言語と文化への理解をさらに深めていきたいと考えています。





## 特別な夏休み

台湾国立屏東科技大学 研修生 江宜軒

今年の夏休みは、私の大学生活の中で最も特別な夏休みとなりました。奈良学園大学で研修の機会をいただき、とても嬉しく思います。学生として日本で授業を受けることをワクワクします、さらに他の国からの友達と出会うことを期待していました。

三週間の日本での生活では、学校で日本語を学び、さまざまな日本文化を体験し、多くの校外学習にも参加いたしました。例えば、福寿園では抹茶の点て方を学び、挽きたての抹茶で淹れたお茶の香りの素晴らしさに感動いたしました。また、東大寺や奈良公園にも行きました。東大寺の大仏はとても大きく、張先生から「高さは約57メートルです」と紹介され、圧倒されました。奈良公園では鹿と触れ合いましたが、特に鹿せんべいを持っている人に近づいてくる鹿は少し怖かったです。それでも、餌をあげる体験はとても楽しい思い出になりました。全ての体験が新鮮で、貴重な学びとなりました。

学校の先生方や学生の皆さんはとても親切でした。たこ焼きとうどんを作った日には、日本の学生の皆さんがとても熱心に教えてくださり、楽しい交流の時間

となりました。その時、ひさしぶりのみちる先生ともたくさんお話することができ、どこへ行ったのか、何を食べたのかなど、さまざまな話題で盛り上がりました。また、学生食堂で昼食をいただく際には、食後に必ず「ごちそうさまでした」と声をかけると、食堂の方が笑顔で「おいしかったですか?」と尋ねてくださり、心が温くなりました。特に印象に残っているのは、板谷先生との会話です。映画村での昼食の際に「将来は何をしたいですか?」と質問されました。この研修に参加する前の私は「公務員になりたい」と答えていたと思いますが、今はもっと幅広く考えるようになりました。さらに、台湾と日本の生活費の違いについて話したとき、まだ日本語を勉強していることを考慮して、板谷先生がやさしい日本語を使ってくださったことも、とてもありがたく感じました。

三週間という時間は本当にあっという間でした。鹿せんべいで鹿に餌をあげたこと、花火大会を見に行ったこと、日本で一か月近く暮らしたことすべてが忘れられない思い出です。この研修で得た経験は、私にとって大切な財産となりました。





## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 陳品瑄

今回、奈良学園大学が準備してくれた研修に参加できて、本当にラッキーだったし、とても感謝しています。三週間ってあっという間だったけど、毎日がとても充実していて、本当にいい経験になりました。

授業は先生が五人いて、交代で教えてくれました。それぞれスタイルが全然違って、優しい先生もいれば、元気いっぱいな先生、ユーモアたっぷりな先生もいて、毎回新鮮で全然飽きなかったです。内容もN5の基礎文法からN2くらいの難しい文法まで幅広く、初めて聞く文法はちょっと焦ったけど、先生たちがすごくわかりやすく説明してくれたので安心できました。実際に使う練習もあって、勉強がもっと楽しく感じられました。

文化体験もめちゃくちゃ楽しかったです。浴衣体験では、くじ引きで順番を決めて、たまたま一番になれて好きな柄を選べたのがラッキーでした。先生が丁

寧に着付けを教えてくれて、最後は髪までまとめてくれてすごく嬉しかったです。しかも選んだ浴衣を日本から持ち帰れるなんて、本当に最高でした。福寿園での抹茶体験も印象的で、自分で一生懸命お茶を挽いて「きれいな色だね」って褒められたのも嬉しかったです。挽いた抹茶とお菓子を一緒に味わうのは格別でした。お茶の作り方や栽培方法の話も聞いて、日本茶の奥深さを知ることができました。

三週間を振り返ってみると、語学の勉強だけでなく、日本の文化や生活にも触れられて、本当に貴重な経験でした。奈良学園大学のみなさんが心を込めて準備してくださったおかげで、こんなに楽しく学べたんだと思います。本当にありがとうございました！この経験は一生の思い出になると思います。





## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 于驊麟

今回の研修で一番印象に残っているのは南禅寺での体験でした。初日に写経をしているとき、外では小雨が降っていました。食事に出かける頃には雨が上がり、外の道にできた水たまりが光に反射してとても美しく輝いていました。

食事のあと、同級生と一緒に夕涼みをしながら散歩し、色々な話をする時間は本当に楽しく、研修団のみんなのことをより深く知るきっかけになりました。翌朝は座禅を体験しました。先生から南禅寺の歴史や座禅を通して得られる大切な気づきについて説明していただき、とても貴重な学びとなりました。

その後の見学では、普通の観光客にはなかなか入ることができない場所にも案内していただき、とても特別な経験でした。また、平日の午後には友人と一緒に京都や大阪、宇治などを訪れました。私たちは観光客のように急いで回るのではなく、ゆっくりとしたペースで散策し、文化習慣を感じながら過ごしました。

特に印象に残っているのは鞍馬寺です。鞍馬寺は京都でも強いパワースポットの一つとして知られています。その日、道中で出会った人たちと挨拶を交わし、励まし合いながら本殿まで登りました。本殿の前で涼しい風を受け、体に力が湧き上がるような感覚があり、すべての努力が報われたと感じました。最後に貴船神社を訪れ、七夕の特別な行事を見ることができました。川床料理を体験することはできま

せんでしたが、とても良い思い出になり、また訪れたいと思いました。

この研修を通じて、私は多くの人と出会い、日本語で話す勇気を持つことができました。完璧に話せるわけではありませんが、誰も笑ったりせず、むしろ「もっと話してみて」と励ましてくれました。先生方もとても優しく、特に寺院や神社について説明されるときの先生のきらきらした目から、日本文化への情熱を強く感じました。私も先生のように、日本文化に対して常に憧れと熱意を持ち続けたいと思います。





## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 劉家安

今回の研修で、浴衣を着たり、福寿園で抹茶を飲んだり、いろいろな日本文化を体験しました。多くの友達とも会うことができ、人生で一番楽しい夏休みになりました。

放課後の時間を利用して、清水寺や勝尾寺など、たくさんの名所を見学し、友達と一緒に花火大会にも参加しました。

日本人と会話することで、自分の日本語が少し上手になり、その中で多くの単語を覚えることができました。帰国後も日本語の練習を続けます。



若草山



奈良燈火会



## 研修レポート

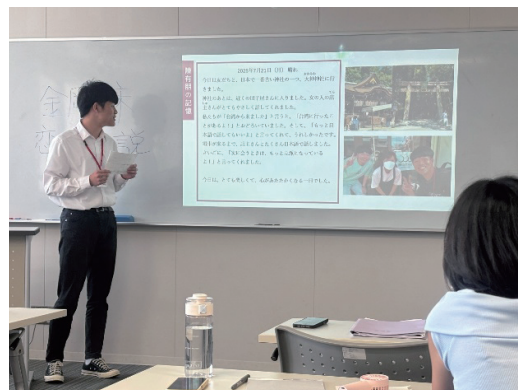
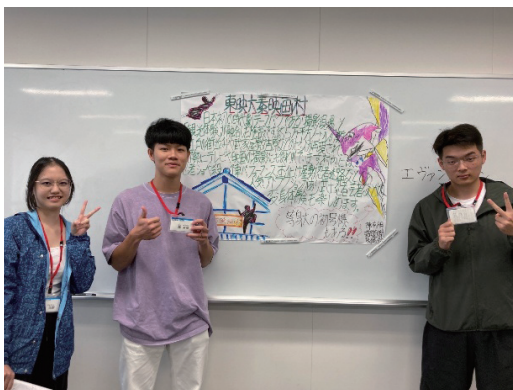
台湾国立屏東科技大学 陳有朋

今年の奈良研修に参加できて、とても光栄でした。事前に準備してくださった瓊慧先生と耘慈先輩に感謝します。特に先生が始業式の前稿を直してくださったので、自信を持って発表できました。今回の研修では多くのことを学びました。私は三つにまとめます。日本文化、観光文化、そして都市と地方のちがいです。

日本では「ルールを守ること」がとても大事だと感じました。歩行者も運転手も交通ルールをしっかりと守ります。これは台湾と大きくちがうところです。一方、日本は「オーバーツーリズム」という問題もありました。たとえば「外国人料金」というものがあ

て、観光の影響に対応していると思いました。最後に、関西は自然や歴史のふんいきがあり、関東は都会的でにぎやかです。都市と地方のちがいを強く感じました。この体験で「読万巻の書より、行万里の路」という言葉の意味がよく分かりました。

授業もとても楽しかったです。先生たちが工夫してくださったので、退屈しませんでした。私は特に石田先生の「ことわざクイズ」が好きです。たとえば「石の上にも三年」ということわざから、がんばって続ければ必ず結果が出ることを学びました。授業で学んだことは日常会話にも役に立ち、日本語を自然に話せるようになったと思います。



## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 梁鈞祐

今回、奈良学園大学での研修に参加できたことは私の誇りであり、大学の学長先生や多くの先生方と出会うことができました。先生方や研修クラスの皆さんには、この三週間大変お世話になり、心より感謝しております。最初の授業では新しい環境にまだ慣れていませんでしたが、日本語の先生方の根気強い指導と楽しいインタラクティブな授業のおかげで、徐々に授業中に発言し質問に答えることができるようになり、積極的に日本語で対面コミュニケーションを取ることも学びました。せっかく日本の大学に来るという貴重な機会は二度とないかもしれないので、この三週間の研修で日本語を使う時間をとても大切にしました。そして日本語でスムーズにコミュニケーションが取れたことで、達成感と喜びを得ることができました。

この三週間は日本語の学習だけでなく、旅行も大きな収穫でした。京都の清水寺、南禅寺、知恩院、八坂神社など、多くの寺院や神社を訪れ、奈良の春日大社、東大寺、興福寺なども巡りました。特に日本の神社は美しさと神秘的な雰囲気に満ちており、神社の中を歩くたびに日本文化の風情を強く感じました。7月末には友人と一緒にUSJ (ユニバーサル・スタジオ・ジャパン) に行きました。台湾にはこれほど大規模な遊園地がないため、園内に入った瞬間、とても感動しました。いくつものエリアが精巧にデ

ザインされ、様々なアトラクションがあり、楽しく充実した一日を過ごすことができました。

8月初に木津川市へ行き、市民祭りの花火大会を観賞しました。人生で初めて日本の夜市を体験し、夜に花火を見ているときに千輪の花火を見ることができ、とても壮観で美しかったです。また、台湾では経験したことのない新しいことがたくさんありました。今年、奈良学園大学の夏季研修に参加できて本当に良かったです。この約1か月の時間の中で、多くの貴重な思い出ができました。改めて、日本語の先生や校長先生、センター長の皆様に感謝申し上げます。おかげさまで無事に研修を終えることができました。





## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 鄭詰婷

今年の夏休み、は日本の奈良で三週間の研修に参加する機会をいただきました。この研修では、日本語の授業だけでなく、様々な文化体験や観光もでき、とても充実した時間を過ごしました。

奈良公園では、たくさんの鹿に出会い、鹿せんべいをあげる体験をしました。鹿たちは人懐っこく、近くまで寄ってきてくれて、とてもかわいらしかったです。公園の自然と穏やかな雰囲気は心に残りました。

東大寺は、巨大な大仏の迫力に感動しました。その歴史の深さや人々の信仰心を肌で感じる事ができ、建築や彫刻の美しさにも心を奪われました。

抹茶作りでは、石臼で茶葉を挽き、自分で点てた抹茶を味わいました。香りが豊かで、飲むと心が落ち着くような感覚がありました。たこ焼き作りでは、生地に具材を入れてくるくと回しながら焼き、笑い合いながら作ったたこ焼きは格別の味でした。

この研修を通して、私は日本語のスキルを向上させるだけでなく、日本の文化や人々の温かさにも触れることができました。奈良での三週間は、私にとって一生の宝物です。これからも日本語を学び続け、またこのような素晴らしい経験ができるよう努力したいと思います。





## 研修レポート

台湾国立屏東科技大学 吳秉秝

この三週間、奈良学園大学での日本語授業と文化体験は、まるで夢のような時間でした。平日の午前中は授業があり、先生やクラスメートと日本語で交流しました。時には難しく感じることもありましたが、それ以上に楽しく、そして大きな学びの時間でした。さまざまな国や地域から集まった仲間と、日本語や文化を通じて友達になれたことは本当に貴重な経験です。放課後には一緒に街を散策したり、観光地を訪れたりしました。特に、日本人の友人と一緒に花火大会に行った日の思い出は忘れられません。夜空に広がる花火の美しさに、言葉を失うほど感動しました。

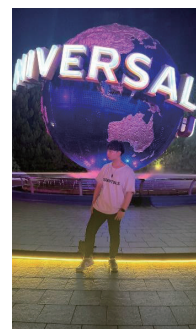
授業以外の時間は自由に過ごせることが多く、学校が企画する体験活動にも参加しました。和服を着て古都の街並みを歩いた日には、自分もその風景の一部になったような気がしました。福寿園での抹茶体験では、日本の茶道の細やかさと心遣いに触れることができました。また、南禅寺での一泊体験では、写経や座禅を通して仏教文化の厳かさと静けさを体感し、心が落ち着く貴重な時間となりました。

放課後には友達と、あるいは一人で、さまざまな

駅や観光地、百貨店へ足を運びました。日本のスーパーは特に面白く、まるで主婦のように値引きされたお弁当や牛乳を選ぶ体験は、日本での生活を実感させてくれました。奈良だけでなく、大阪や京都にも出かけ、今年開催された万博や、憧れの USJ にも行きました。毎日が驚きと楽しさにあふれていました。

日本の街並みはとても美しく、緯度が高いためか光の加減がまるでフィルターをかけたようで、どこを見ても心地よく感じられました。毎日一万五千歩以上歩きましたが、不思議と疲れはなく、むしろ充実感と喜びに満たされていました。

夜は宿泊先に戻り、クラスメートとロビーで集まって、飲み物を飲みながらおしゃべりを楽しむ時間もありました。悩みや不安のない、自由で楽しい毎日は、一生忘れられない思い出です。この三週間の生活は、日本語力を高めるだけでなく、日本文化や日常生活を深く体験する機会となり、そして多くの大切な友人との出会いをもたらしてくれました。私にとって、この時間は「夢のようでありながら、確かに存在した」かけがえのない宝物です。





## 東アジア文化交流研修レポート

特別聴講生 郭鄧豪

今回の沖縄研修では、事前に配られた講義資料をもとに学んでいた内容を、実際に現地確かめながら体験できる、とても貴重な機会になった。特に、初日に琉球大学で受けた神谷先生の講義は、この研修全体の理解を支える中心的な時間で、個人的にも「ここから研修が本格的に始まったんだな」と強く実感した瞬間だった。その後の見学や体験で得た気付きも、結局は最初の講義があったからこそ深く理解できたのだと感じている。

神谷先生はまず、「南の文化」という視点から琉球を捉える大切さを、ゆっくりと、わかりやすい言葉で説明してくださいました。本土の“北の文化”とは環境も歴史も大きく異なり、サンゴ礁を中心とした自然環境が昔から人々の暮らしに深く影響してきたという話には、思わず頷きながら聞き入ってしまった。例えば、農耕だけではなく漁業生活の柱となっていたこと、そして村落(グスク)の形成が本土に比べて約1000年遅れて始まったという説明は、資料だけではなかなか実感できなかった部分だが、神谷先生の語り口や例え話のおかげで、背景がすっと頭に入ってきた。

また、三山時代から琉球王国の成立、さらには薩摩侵攻や近代化の流れにいたるまで、境界線の変化というテーマと結びつけて説明していただいたことで、今まで点で覚えていた歴史が一本の線として繋がっていく感覚があった。政治的な境界が変わるたびに、人々の生活や文化がどのように影響を受けたのかという先生の解説は、沖縄を“日本の一地域”として見るのではなく、東アジアの中で大きな役割を果たしてきた場所として捉える視点を与えてくれた。これは教科書や資料だけでは得られなかった学びで、まさに現地で聞く講義の醍醐味だったと思う。

特に印象に残ったのは、先生が最後に言っていた「沖縄は歴史の中でさまざまな地域との交流を重ね、そのたびに多様な文化が折り重なってきた場所である。」という言葉で、この一言が今回の研修のテーマを象徴しているように感じた。歴史の中で多様な文化が混じり合い、時に外からの影響に揺さぶられながらも、自分たちの文化を育ててきたという沖縄の背景は、想像していた以上に奥深かった。

首里城を訪れたとき、講義で得た知識がそのまま目の前の景色と結びつき、「ああ、これが“南の文化”の表れなんだ」と実感した。朱色の城壁や正殿の装飾は、中国文化の影響を感じさせながらも、どこか柔らかく独特の雰囲気をもっていて、本土のお城とはまったく違う印象だった。復元工事が続いているにもかかわらず、たくさんの人で賑わっていたのも、琉球王国の歴史が今も人々にとって身近

で大切な存在であることを示しているように思えた。

二日目の午前、美ら海水族館へ向かう前に、近くのレストランで昼食のビュッフェを楽しんだ。沖縄料理から定番の洋食まで色々揃っていて、思った以上に豪華でびっくりした。特に、海ぶどうやゴーヤーを使った料理は本土ではあまり食べる機会がなく、「あ、ここでも文化が生活に根付いているんだな」と感じられて面白かった。

その後の美ら海水族館では、巨大なジンベエザメが悠々と泳ぐ姿を間近で見て、思わず「うわー！」と声が漏れてしまうほど圧倒された。エイがゆったりと動く姿もどこか不思議で、海の生き物には本土で見るとは違う存在感があった。水族館の後に立ち寄った海辺の景色も忘れられない。驚くほど青く透き通っていて、本土の海とは明らかに色の深さが違い、講義で聞いた「環境が文化を形づくる」という言葉が改めて実感として胸に残った。

午後の琉球村では、文化の“生活に根ざした部分”に直接触れられたことが何より印象的だった。琉球舞踊のステージでは、三線の落ち着いた音色に合わせて踊る姿がとても優雅で、どこか時間がゆっくり流れているように感じた。講義で学んだ“南の文化の穏やかさ”が、そのまま目の前に再現されているようだった。また、方言混じりの歌や語りのテンポも独特で、沖縄の言葉の柔らかさや響きの美しさに自然と耳が傾いた。

シーサーの色付け体験では、筆で色を選びながら塗っていく作業が意外と難しく、最初は戸惑ったものの、慣れてくるとどんどん楽しくなり、気づいたら夢中で作業していた。見た目は可愛らしいのに、地域を守る象徴として長い歴史を持つ存在だと知ると、自分の手で仕上げたシーサーが少し誇らしく思えた。

研修の最後、夜に一人でホテル近くの海辺を歩いたとき、昼とはまったく違う静けさの中で、波の音だけが心地よく響いていた。その静かな時間の中で講義や体験を思い返していると、「沖縄の文化は自然と切り離せない」という先生の言葉がじんわりと胸に広がっていった。屋間に見た青い海とは違い、夜の海はどこか神秘的で、沖縄という土地の深さを改めて感じられた瞬間だった。

今回の研修を通して、琉球文化は教科書で覚える知識だけでは分からない、実際の空気や景色、人々の暮らしに触れてこそ理解できるものだ気づいた。今後、沖縄や東アジアの歴史を学ぶときには、今回の体験をしっかりと土台にして、さらに深い理解へとつなげていきたいと思う。



## 東アジア文化交流研修レポート

特別聴講生 許姝婷

今回、私は三日間にわたる沖縄研修に参加した。本研修の目的は、沖縄の歴史・文化・自然環境について実地で学び、講義だけでは得られない体験的な理解を深めることであつた。沖縄は本土とは異なる歴史的背景を持ち、独自の文化が形成されてきた地域である。限られた日程ではあつたが、大学での講義や歴史的建造物、自然施設の見学、さらには実際に海での体験を通して、多角的に沖縄の魅力と課題を知る貴重な機会となつた。

研修一日目は、琉球大学訪問し、沖縄の歴史に関する講義を受講した。講義では、琉球王国時代から日本への編入、そして戦後のアメリカ統治に至るまでの歴史的変遷について詳しく説明がなされた。特に印象に残つたのは、沖縄戦が地域社会や人々の生活に与えた深刻な影響であり、現在に至るまで続く基地問題や平和への願いについての話である。これまで教科書で学んだ内容よりも、より現実的で重みのある歴史として感じる事ができた。

午後は首里城を見学した。首里城は琉球王国の政治・文化の中心であり、その建築様式や色彩は日本本土の城とは大きく異なつていた。朱色を基調とした華やかな外観や、中国文化の影響を受けた装飾から、沖縄がかつてアジア諸国との交流拠点であつたことを実感した。また、2019年の火災による影響についても説明を受け、文化財を守ることの大切さと、その再建への努力に対して深い敬意を抱いた。

二日目は、沖縄美ら海水族館と琉球文化を訪れた。沖縄美ら海水族館では、巨大な水槽の中を悠々と泳ぐジンベエザメやマンタの姿が非常に印象的であつた。沖縄近海に生息する多様な海洋生物を見ることで、この地域の海がいかに豊かな生態系を持っているかを実感した。同時に、海洋環境の保護の重要性についても改めて考えさせられた。

午後に訪れた琉球文化村では、伝統的な赤瓦の家屋や工芸品、民族衣装などを通して、沖縄の生活文化に触れることができた。エイサーや三線に関する展示を見学し、琉球文化が現代においても大切に受け継がれていることを知つた。観光としてだけでなく、文化としての沖縄の価値を深く感じる時間となつた。

最終日は、沖縄の海辺を訪れ、実際に海で泳ぐ体験を行った。透き通つた青い海と白い砂浜、穏やかな波は、これまで見たどの海よりも美しく感じられた。暖かい気候の中で自然と触れ合うことで、沖縄の自然環境の豊かさと、その魅力を身体で感じる事ができた。また、観光地としての沖縄だけでなく、そこに暮らす人々の生活と自然との関わりについても思いを巡らせるきっかけとなつた。

今回の沖縄研修を通して、私は沖縄という地域が持つ多層的な魅力を知ることができた。歴史、文化、自然のすべてが密接に関わり合い、独自のアイデンティティを形成していることを実感した。特に、過去の辛い歴史を乗り越えながらも、文化を大切に守り続ける人々の姿勢には強い感銘を受けた。

この研修で得た知識と経験は、今後の学習や異文化理解において大きな財産になると考えている。沖縄で見た景色、聞いた話、体験したことを忘れず、より広い視野で物事を捉えられるよう努力していきたい。

おわりに

三日間という短い期間ではあつたが、非常に内容の濃い研修であつた。机上の学習だけでは得られない「現地で学ぶこと」の重要性を改めて実感した。今後もこの経験を活かし、歴史や文化に対する理解をさらに深めていきたい。



# 東アジア文化交流研修レポート

特別聴講生 徐 吉超

今年の夏休みに、私は沖縄での研修に参加する機会を得ました。今回の研修は、琉球大学での講義をはじめ、沖縄美ら海水族館や琉球村の見学など、多くの貴重な体験を通して沖縄の歴史・文化・自然について深く学ぶことができました。短い期間ではありましたが、実際に沖縄の地を訪れ、人々と触れ合いながら学ぶことで、教科書では得られない多くの気づきを得ることができました。

## 1. 琉球大学での講義

研修の最初のプログラムは、琉球大学で行われた講義でした。琉球大学の先生方は、沖縄の地理的特徴、歴史的背景、そして独自の文化について、さまざまな角度から丁寧に説明してくださいました。沖縄は日本本土から離れた島々であり、その地理的な位置から長い歴史の中で中国や東南アジアとの交流が盛んだったことを学びました。また、かつての琉球王国が独自の文化を発展させながらも、他国との関係を大切にしてきたことがとても印象に残りました。

先生は、琉球王国時代の外交や貿易の様子、そして戦争によって失われた文化の再生などについても話してくださいました。特に、戦後の人々の努力によって現在の沖縄文化が再び息づいているという話を聞いたとき、沖縄の人々の強さと誇りを感じました。

## 2. 沖縄美ら海水族館での学習

次に訪れたのは、沖縄美ら海水族館でした。世界でも有名なこの水族館には、多種多様な海洋生物が展示されており、実際に見ることで海の生態系の豊かさを実感することができました。特に巨大なジンベエザメが悠々と泳ぐ姿は圧倒的で、自然の力強さと美しさを同時に感じました。

また、展示だけでなく、職員の方々の説明を通して、沖縄周辺の海がどれほど貴重で繊細な環境であるかを学びました。海洋汚染や地球温暖化の影響でサンゴ礁が減少しているという話を聞き、自然を守ることの大切さを改めて考えさせられました。この体験を通して、海の生き物だけでなく、人間と自然の共存についても深く考える機会になりました。

## 3. 琉球村での文化体験

私にとって最も印象に残ったのは、琉球村での研修体験でした。琉球村では、昔の沖縄の家屋や街並みが再現されており、実際に当時の生活を感じることができました。現地の方々が伝統衣装を着て演奏する三線の音色や、エイサーの力強い踊りを間近で見ることができ、とても感動しました。

また、職人の方々からシーサー作りや紅型染めの体験もさせていただき、文化が人々の生活の中に息づいていることを実感しました。琉球文化は、外からの影響を受けながらも自分たちの個性を大切に守り続けてきた文化だと感じました。特に、沖縄の人々の穏やかで親しみやすい人柄、そして「なんくるないさー（なんとかなるさ）」という前向きな考え方には強く心を打たれました。

## 4. 自由活動と自然体験

研修の最終日には自由行動の時間があり、私は友人たちとともに沖縄の海を訪れました。エメラルドグリーンの海と白い砂浜はまるで絵のようで、波の音を聞きながら過ごす時間は本当に癒されました。地元の方々が海を大切にしている姿を見て、自然と共に生きるという沖縄の精神を感じました。

また、食事の面でも多くの発見がありました。ゴーヤーチャンプルーやソーキそばなどの郷土料理を味わいながら、沖縄の食文化にもその土地の気候や歴史が反映されていることを学びました。

## 5. 研修を終えての感想

今回の沖縄研修を通して、私は単に観光としてではなく、沖縄という地域の「歴史」「文化」「自然」「人々の心」に触れることができたと感じています。琉球王国から現在に至るまでの複雑な歴史を学び、沖縄の人々がそれをどのように受け入れ、乗り越えてきたのかを知ることで、文化の大切さと人間の強さを実感しました。

また、現地で実際に人々と関わり、彼らの明るさや優しさに触れることで、「本当の沖縄の魅力」は景色の美しさだけでなく、人々の温かさにあると強く感じました。今後もこの研修で学んだことを忘れず、異なる文化を理解し尊重する姿勢を大切にしていきたいと思います。

# 東アジア文化交流研修レポート

特別聴講生 趙 銘航

## はじめに

本研修は、令和7年9月2日～4日にかけて沖縄県で実施され、琉球大学での学習を基盤として、歴史・文化・自然に関する理解を深めることを目的としたものである。大学での講義、史跡の見学、自然・文化施設の訪問を通し、琉球文化がどのように形成され、どのように受け継がれてきたのかを多面的に学ぶ機会となった。

## 1. 琉球大学での講義

初日の講義は、琉球大学 国際地域創造学部の神谷智昭准教授によって行われた。テーマは「琉球文化の基層理解」であり、歴史的背景、地理条件、自然環境がどのように文化形成へ影響を及ぼしたのかを総合的に整理する内容であった。

教授はまず、琉球諸島の地理的特徴を軸に、島々が他地域との交流を促す「海の交差点」として機能してきたことを説明された。各島の隔たりや気候の多様性が、地域ごとの文化的差異を生み出す要因になったという視点が特に印象的であった。

歴史面では、王国成立以前の社会構造から始まり、王国統一後の外交姿勢や海洋交易の発展を、文献資料や地図を交えて整理していただいた。外部の影響を受けつつも固有の文化を維持し、自らの特色を形成してきた点が、琉球文化の大きな特徴として強調された。

さらに、教授は珊瑚と水温の関係にも触れ、自然環境と文化の結びつきを解説された。沖縄周辺の海域は、わずかな水温変化が珊瑚の共生藻に影響を与え、白化現象を引き起こすほど繊細であること、そして珊瑚礁が人々の生活圏や海上交通にも大きな役割を果たしてきたことを述べられた。自然環境が単なる背景ではなく、社会の営みそのものに深く関わっているという視点は、非常に新鮮であった。

この講義は、沖縄で見聞きするすべての体験の「基盤」となる視点を与えてくれるものであり、その後の研修内容を理解する上で大きな指針となった。

## 2. 美ら海水族館での学習

翌日に訪れた美ら海水族館は、本研修の中で最も強く心に残った場所である。沖縄の海を巨大なスケールで再現した展示空間は、講義で学んだ「海と人の関係」を具体的に感じさせてくれた。

巨大水槽を優雅に泳ぐジンベエザメの姿は圧倒的で、海の持つ力強さと静けさを同時に感じ取ることができた。光と水が揺らめく空間に身を置くことで、海という存在がただの観光資源ではなく、生態系としての尊さをもつものだと実感できた。

また、スタッフの方からは、海水温上昇や汚染がサンゴ礁に与える影響、沖縄の海域がいかに脆弱であるかについて、詳しい説明を受けた。講義で聞いた「自然と文化の相互影響」が、水族館での観察を通してさらに強い説得力をともなって理解できた。

個人的には、この水族館での時間が最も心に響き、沖縄の海に深い関心と親しみを持つきっかけとなった。

## 3. 首里城・琉球村での文化体験

首里城では、講義で学んだ歴史を実際の空間と重ね合わせることで、王国の政治構造や文化的象徴がどのように形作られたのかを体感することができた。遺構や復元建築を目にすることで、琉

球王国が東アジア交流の中でどのように位置づけられていたのかが、より立体的に理解できた。

琉球村では、民家の造り、工芸、音楽などの伝統文化を直接体験した。三線の柔らかな音色やエイサーの力強いリズムは、文字で理解する文化とはまったく異なる実感を伴い、琉球文化が日常生活の中で息づいていることを強く感じさせた。

## おわりに

今回の沖縄研修は、教室で得た知識を現地での体験によって立体化し、琉球文化を多角的に理解するための極めて貴重な機会となった。琉球大学での講義から始まり、自然・歴史・生活文化に触れる各プログラムを通じて、文化とは単なる「地域の特色」ではなく、自然環境・歴史的背景・人々の営みが長い時間をかけて積み重なった結果として形成される総合的な体系であることを改めて実感した。

とりわけ、琉球大学での学習は、知識の断片を体系的に結び付ける重要な役割を果たした。歴史・地理・自然という異なる領域が、琉球文化の内部でどのように相互作用してきたのか、そして外部世界との関係性の中でどのような独自性が育まれてきたのかについて、明確な視点を得ることができた。講義内容を踏まえたうえで首里城や琉球村を訪れることで、書籍や資料の中にあっただけの情報、具体的な景観や人々の姿を通して立ち上がり、理解がより深まり、記憶にも強く残った。

一方、美ら海水族館での体験は、沖縄の自然環境に対する関心と理解をさらに強める契機となった。海洋生物の多様性や生態系の複雑さに触れることで、自然が人間社会の基盤としてどれほど重要な役割を果たしているのか、実感を伴って理解することができた。また、水温上昇や珊瑚白化など、沖縄の海が抱える環境問題についての説明を聞くことで、自然環境の脆弱さと、私たちが直面している課題の大きさを痛感した。自然と文化の密接なつながりを知ったうえで臨んだこの見学は、単なる観光を超えた深い学びをもたらしてくれた。

さらに、現地の方々との交流や、日常生活に根ざした文化体験を通して、琉球文化の本質が「人の温かさ」と「地域への誇り」にあることを強く感じた。伝統芸能の演舞や工芸体験に見られる表現の豊かさは、過去の遺産として大切に継承されているだけでなく、今もなお生活の中に息づき、地域の文化として力強く保たれている。こうした文化のあり方は、異文化理解において最も重要な要素の一つであり、他地域の文化を学ぶ際の視点として今後も大切にしていきたい。

今回得られた学びは、東アジア地域の文化や歴史を広く理解するための基礎として大いに役立つものである。同時に、文化の多様性を尊重し、環境・歴史・社会の背景を踏まえて他者を理解する姿勢の重要性を再認識する機会ともなった。特に、自然環境と文化の関係性を深く知ることができた点は、今後の学習や研究の方向性を考える上で大きな示唆となった。

今後は、今回の研修で得た知識や経験をより深い学習へとつなげ、地域研究や国際理解の分野において視野をさらに広げていきたい。また、今回感じた自然環境への関心や文化への敬意を忘れず、これからの学びや実践に活かしていくことで、異文化交流に主体的に関わる姿勢を持ち続けたいと思う。今回の研修を支えてくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げる。



# 東アジア文化交流研修レポート

特別聴講生 張 力源

## 1. はじめに

今回の沖縄研修は、「自然環境と文化の関わりを現地で理解する」という目的のもと実施され、私にとって教室では得られない学びをもたらす貴重な機会となった。特に、初日の琉球大学での講義と、美ら海水族館での視察は、沖縄という地域社会が長い歴史の中でどのように自然と向き合い、文化を形成してきたのかを考える上で大きな示唆を与えてくれた。本レポートでは、研修過程で得た気づきや理解の深化について整理し、今後の学習への展望について述べたい。

## 2. 琉球大学での講義から得た基本的理解

研修初日に行われた琉球大学の教授による「琉球文化の基層理解」の講義は、今回の研学全体の思想的な土台となった。教授はまず、琉球諸島がアジア圏の「海の交差点」として、歴史的に多くの地域と交流してきたことを強調された。島々が互いに隔たりをもちつつ、それぞれ異なる気候条件や地形をもっていることが、多様な生活文化の成立につながったという説明は、沖縄文化の複雑さを理解する上で大きなヒントとなった。

また、王国成立以前の社会構造、王国統一後の外交政策や海洋交易の発展について、文献資料や地図を用いて体系的に整理していただいた。琉球は外部からの影響を受けながらも、他地域に流されない独自の文化を育んできたことが、強く印象に残った。特に「自然環境は文化の背後にある価値観や生活形態にまで影響を及ぼす」という教授の言葉は、研修の後半で何度も思い返すこととなった。

講義の後半では、サンゴ礁と水温の関係にも触れられ、わずかな水温の変化がサンゴの共生藻に影響を与え、白化現象を引き起こすことが説明された。自然環境と人間生活は切り離されたものではなく、沖縄では両者が重層的に絡み合っているという視点は、以後の研学内容を読み解く上で欠かせない基礎となった。

## 3. 美ら海水族館での実地学習

翌日に訪れた美ら海水族館では、前日の講義内容が実物の展示によって立体的な理解へとつながった。巨大な水槽の中でゆったりと泳ぐジンベエザメとエイの姿は圧巻であり、海という空間がもつ広大さ、寂しさそして生命の力を

強く感じさせた。同時に、水族館は単なる観光施設ではなく「地域海域の現状を伝える教育的拠点」であることも認識することができた。

海水温上昇や汚染物質が沖縄の海へ与える影響について、より具体的な説明を伺った。サンゴ礁の白化現象や海洋生態系の変化が地域社会の生活にどのように影響するのかを聞き、前日に学んだ「自然と文化の相互依存」をより実感として理解することができた。

また、水族館の展示は海と人との関わりを視覚的に示しており、漁業、祭祀、食文化など、沖縄の人々の生活が海と深く結びついていることがよく分かった。海は単なる資源ではなく、生活・信仰・文化の中心として人々の心に根づく存在であるという点が、私の中で特に印象に残った。

## 4. 研修通して得た洞察と思考の深化

今回の研学で最も強く感じたのは、「現地に身を置かなければ気づけない文化理解の質」である。教科書で知識として理解していた“琉球の多様性”や“自然との共生”といった概念は、実際の海の色、空気、展示物、そして地域の人々の説明に触れることで、初めて実感を伴った理解へと変わった。

特に、自然環境の変化が文化の継承に直接影響するという視点は、これまであまり意識してこなかったものであった。たとえば、サンゴ礁の衰退は単に生態系の問題ではなく、沖縄の景観、観光資源、漁業、さらには祭祀文化にまで連鎖的な影響を及ぼすという点は、研学ならではの気づきである。

また、琉球文化は「外来文化を受け入れつつ自らの核を守る」柔軟性を持っているという教授の指摘は、グローバルが進む現代社会にも通じる普遍的なテーマだと感じた。沖縄の歴史的経験は、多文化環境で生きる私たちにとっても大きな示唆を与えてくれる。

## 5. おわりに

今回の沖縄研学は、単なる見学や旅行ではなく、「自然と文化を現地で読み解く力」を養う貴重な学びとなった。教室では得られない“体験としての理解”は、今後の学習や研究において確かな基盤となるだろう。今後も机上の知識にとどまらず、自らの足で現地を訪れ、観察し、考察する学びを積み重ねていきたい。



## 東アジア文化交流研修レポート

特別聴講生 劉佳寧

今回、大学のプログラムで沖縄研修に参加し、数日間ではありましたが、実際に現地を訪れることで沖縄の歴史・文化・自然環境について多くのことを学ぶことができた。今までは写真や動画のイメージが中心だったが、実際に見て歩くことで、沖縄が日本本土とは異なる背景を持つ地域であることをより実感した。

研修の最初に訪れた琉球大学では、学生との交流はなかったものの、先生方から沖縄の地理的特徴や歴史、現在の社会状況について詳しい説明をいただいた。沖縄はかつて琉球王国として独自の文化と政治体制を持ち、中国・日本・東南アジアなどさまざまな地域と交流してきたため、多様な文化が混ざり合った独特の雰囲気を持っている。また、戦争やその後の米軍統治といった出来事が現在にまで影響していることも学んだ。こうした説明を聞いた上で沖縄の街並みや文化を見ると、その背景が理解しやすくなり、ただの観光では得られない視点を持つことができたと思う。

琉球大学の訪問後に向かった首里城では、2019年の火災による復元工事が続いているものの、城郭の構造や残された部分から、琉球王国の中心としての役割や建築の特徴が十分に感じられた。本土の城とは異なり、赤い漆や独特の装飾が施され、外観からも琉球文化の影響がよく分かる。中国的な宮殿の要素を取り入れつつも、琉球独自の工夫が随所に見られた。ガイドの説明を通して、首里城が政治・外交・儀式的場としてどのように機能していたのか理解でき、琉球王国の歴史がより身近に感じられた。

また、沖縄美ら海水族館では、沖縄周辺の海洋環境をテーマにした展示を見ることができた。特に「黒潮の海」の大水槽では、ジンベエザメやマンタが悠々と泳ぐ姿を間近で見ることができ、その迫力に圧倒された。さらに、珊瑚の生態や深海生物の展示、海亀の保護活動など、海洋環

境に関する教育的な内容も多く、沖縄が豊かな海に囲まれた地域である一方、その環境が気候変動などの影響を受けつつあることも知った。水族館が研究や保全活動にも力を入れていることが分かり、観光施設としてだけでなく学術的役割も持っている点が印象に残った。

琉球村では、沖縄の伝統的な生活文化をより具体的に知ることができた。赤瓦の民家や石垣の道、三線の音色や伝統舞踊のパフォーマンスなど、琉球文化が日常生活の中でどのように根付いてきたのかを、体験を通して理解することができた。展示や説明だけでなく、実際の空間の雰囲気を感じられるため、文化のイメージがより鮮明になった。

研修の自由時間には海辺を散策する機会もあった。沖縄の海は透明度が高く、場所によって色が変わるのが印象的だった。観光地としての魅力だけでなく、海が人々の生活や文化、産業と深く結びついていることを実感した。琉球大学で聞いた“海との関係性”という話が、実際の風景を見ることでよく理解できた。

今回の研修を通して、沖縄がどのように歴史や地理、文化、自然環境によって形づくられてきた地域なのか、以前よりもずっと具体的に理解できるようになった。首里城や琉球村、美ら海水族館など、それぞれの場所で異なる視点から沖縄を学ぶことができ、複数の要素が重なって現在の沖縄をつくっていることがよく分かった。短い期間ではあったが、実際に訪れたことで、沖縄に対する見方が大きく変わったと思う。

今後、機会があれば今回訪れられなかった地域にも足を運び、沖縄の文化や自然についてさらに理解を深めたいと感じた。



# 東アジア文化交流研修レポート

特別聴講生 梁潤生

## はじめに

本報告書は、令和7年9月2日から9月4日にかけて沖縄県で実施された「東アジア文化交流研修」の成果をまとめたものである。本研修は、琉球大学を中心として、琉球の歴史と文化に対する理解を深めることを目的として企画された。琉球大学での講義、首里城見学、美ら海水族館や琉球村への訪問などを通じて、琉球の独自性を学んだ。

研修の目的は、琉球の歴史的理解と文化の概要把握にあり、特に琉球大学での学術的アプローチを重視した。本報告では、9月2日に実施された琉球大学の講義に焦点を当て、その内容を詳述する。

9月2日、琉球大学国際地域創造学部の神谷智昭准教授により、「琉球文化入門」と題する講義が行われた。講義は、琉球の歴史と地理条件を基盤として、文化の形成過程を解説するもので、約2時間にわたって実施された。講義内容は、資料を活用し、体系的に構成されていた。以下、講義の主要なポイントを歴史と地理の観点から報告する。

## 1. 琉球の歴史に関する講義

講義では、琉球の歴史が重点的に扱われた。神谷准教授は、琉球歴史の特異性を、東アジアの海洋交易と政治関係の中で位置づけ、以下のように段階的に説明した。

まず、琉球王国の成立前史として、先史時代のグスク時代(12~14世紀)に言及した。この時期、沖縄本島を中心に複数の按司がグスクを築き、小規模な共同体を形成していた。地理的に孤立した島嶼環境が、これらの社会構造に影響を与えたことが指摘された。例えば、琉球列島の珊瑚礁地形は、海洋資源に依存した生活を促し、交易ネットワークの萌芽となった。

次に、1429年には尚巴志による琉球王国の統一が解説された。王国は首里城を中心として、明(中国)との朝貢関係を築き、東アジアの海上貿易で繁栄した。講義では、この時期の琉球が「万国津梁」の役割を果たしたこと、つまり中国、日本、朝鮮、東南アジアを結ぶ中継点として機能したことが強調された。

講義では、この時期の政治的な適応が、琉球の独自性をむしろ強化した面があると指摘された。例えば、琉球の言語や芸能が、外部圧力の中で発展したことが紹介された。

最後に、1879年の琉球処分(明治政府による併合)まで

を概観し、近代化の中で琉球が日本に組み込まれる過程が簡潔に説明された。歴史の講義全体を通じ、神谷准教授は、琉球史を単なる地方史ではなく、東アジア規模の交流史として捉える重要性を強調した。

## 2. 琉球の地理条件に関する講義

講義では、琉球の地理条件が文化と歴史に与えた影響が詳細に論じられた。

まず、琉球列島の基本的な地理的特性として、位置、気候、地形が説明された。琉球諸島は、台湾と九州の間に位置する弧状の島々からなり、総延長約1,200キロメートルに及ぶ。気候は亜熱帯海洋性気候に属し、高温多湿で台風の影響を受けやすい。この気候が、農業や建築に影響を与えたことが指摘された。例えば、湿気対策として発達した沖縄の伝統家屋は、地理的条件の産物である。

地形に関しては、珊瑚礁に囲まれた複雑な海岸線と、隆起珊瑚の石灰岩地形が特徴的である。講義では、この地形が海洋資源の豊かさをもたらし、歴史的に漁業や交易が発達した基盤となったと説明された。また、島々が分散しているため、各地域で微妙に異なる文化が生まれたことが、文化の多様性を促進したと補足された。

琉球大学の講義以外の活動については、

首里城見学(9月2日午後)：講義後、専用車で首里城に移動し、約1時間程度の見学を行った。首里城は琉球王国の政治的中心地として、講義で学んだ歴史を実感できる場であった。

美ら海水族館と琉球村訪問(9月3日)：これらの訪問は、琉球の自然と伝統文化に触れる機会であった。美ら海水族館では海洋生物の観賞、琉球村では工芸体験を行った。

## おわりに

本研修を通じて、琉球大学での講義は、琉球の歴史と地理条件を体系的に学ぶ貴重な機会となった。神谷准教授の解説は、琉球文化の成り立ちを東アジアの文脈で理解することを可能にし、知見を大いに広げた。講義では、王国の興亡と外部交流の重要性が、自然環境が文化形成に与えた影響が明確に示され、両者が相互に絡み合う様子が理解できた。今回の学びを今後の研究や交流活動に活かし、東アジア文化への理解を深めていきたい。最後に、本研修を支えてくださった関係者に感謝申し上げる。



## 国際看護論演習

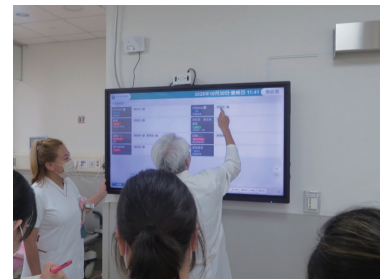
2231113 喜左上 るい

今回の国際看護学演習では病院見学や大学での講義を受けて、台湾の看護は「技術の習得」が質の高い看護に繋がると考えており、対して日本は「個別性のある看護」。つまり、患者に寄り添うという日本独自の捉え方を習得することで患者の全体像を把握し、質の高い看護に繋がると考えているのではないかと感じた。また、その背景にはその国の医療情勢やこれまでの歴史、価値観が影響を及ぼしていると感じた。実際に台湾の実習はシャドーイングや技術の習得がメインで日本のような看護展開を実習で行うことはない。それは看護師不足という背景から現場にですぐに使える看護師が必要であるからだと学んだ。さらに、医療現場の見学を通して日本の看護ではできるだけ身体拘束にならないようにセンサーマットなどの使用は極力避けることが多いが、台湾では安全に最期を過ごすという観点や看護師不足で見回りの回数を増やすことができないことからセンサーマットの導入などが広がっていた。

台湾は国家試験の合格率の低さや看護職の給料がネイリストとほぼ同じなどの社会的背景か

ら看護師が不足しており、現場ではAIの活用が広がっていた。医療事故の減少や物品の把握が行いやすいなどのメリットの反面、停電などが起こったときにはどうするのだろうか、や、結局は人間の手で投薬などを行うため本当に安全であるのかななどの疑問も残った。

6日間を通して、日本に比べてとても温かく迎えてくれるかたが多く、台湾を好きになってほしい！という気持ちを感じることができました。今回の経験を心得て日本人でもそれぞれの価値観を持つように、台湾と日本でも異なる価値観があるため、その国・人の価値観を尊重した看護ができるようになりたいと強く思いました。



2231122 田中奈菜

台湾で国際看護の研修を通して、日本と台湾では文化や考え方に大きな違いがあることに驚いた。特に、医療の仕組みで、台湾では人手不足のためにAIや機械を大量に利用しており、足りない部分は家族が支援をしていると言うことに違いがあった。医療を必要とする人々に適切なサービスを提供するにはAIや機械を利用して効率よく、安定したサービスを提供しなくてはならない。一方で、もし災害や地震が来た時に、その機械が使えなくなってしまうと、と

思うと不安な部分もあるように感じた。災害大国の日本だからこそ、AIや機械を用いてないのではないかと考えるきっかけにもなった。その国の風習や歴史、地に合わせて発展しているのだと学ぶことができた。医療従事者に全てを任せるのではなく、これまで自宅で介護してきたという歴史があることが、老人ホームでの老後の暮らしの考え方に繋がっているのだと学んだ。

また、文化の面では、親日派というのを夜市や街中の風景から感じることができた。台湾に行くまでは親日と言っても、何人かの人が日本のことが好きなのかなと思っていたけれど、実際は日本語で書かれたお店があったり、日本語での注意書きが書かれていたり、夜市に来たお客さんが翻訳をしてくれたり、すごく良くしてもらった。自分が思っていたよりも人と人とのつながりが深く、温かい印象を受けた。

医療や看護だけでなく、食事や文化など様々な面でいろいろなことを勉強できて、大きな学びを得ることができたし、すごく楽しい研修だった。





2231127 新島 瑞生

### 【台湾の文化的な産褥ケアについて】

台湾では、日本とは異なる産褥期ケアの文化があった。台湾では産褥期にケアを行わなければ、頭痛や腰痛などの不調が現れるとされ、様々な習慣が大切にされていた。例えば、産後はお腹に子どもがいなくなるために代わりにゆで卵を2つ用意して食べる習慣がある。産後3日目は特別な人に来てもらい、ミカンやりゅうがんなどをいれたためるま湯で赤ちゃんを沐浴させる習慣もあった。また、産後3～7日には、旦那さんの家に出産報告とお酒をお土産として持っていく。産褥12日目は奥さんの実家に、食べ物をたくさん持っていき、産後のお母さんがたくさん食べる。産後1か月は、親戚全員で食事をとり、殻を赤く塗ったゆで卵やケーキを、親戚に渡すなどの習慣があると知った。

さらに、産後の女性は「陰の気」が強くなりやすいとされ、お寺や他の人の家に行くことは失礼になるとされていた。その間は、冷たいものに触れてはいけないとされ、髪を洗うにも、工夫がされており、先に髪を洗い一旦乾かしてから身体を洗うなどの工夫がされていた。産後は、温かいものを身体の中に詰め込むことが必要だとされていて、鶏肉や漢方を使った伝統的なスープが親しまれていた。(図:参照)実際に飲ませていただくと、漢方の苦みなどはなく、比較的飲みやすく、ショウガなども入っているため、身体が温まるような、まさに産後に適したスープであった。

日本では、産後はお祝い事として子どもを出産した母親の身体の回復や育児についてのサポートが始まり、親戚からもお祝い事としてお金や育児に必要な物品などが贈られる。しかし台湾では、文化的な考えから身体を温めることや伝統的な漢方などを利用して病気を予防するようなケアが行われていることを学んだ。さらに、自分たちから周囲の家族や親戚などお世話になった人に贈り物をするなどの違いがあった。しかし、方法や考えは違うが、出産した女性を気遣うという考えは同じで、大切にされていることを学んだ。今回の台湾研修では、初めて日本以外の文化に触れる良いきっかけとなり、自分の知らないことが世界にはまだまだあるということを知る良い機会となった。改めてこれから看護師として働くうえでも、自分の価値観だけで判断するのではなく、宗教や国ごとに伝統的な考えがあることを忘れないようにしたいと思った。



2231142 山口 蒼元

はじめての海外。はじめての国際学習。緊張や不安でいっぱいでした。自分は海外に行ったこともなければ、海外に行く気もなかったし英語が苦手だから海外は無縁だと考えていました。しかし、友達や先生に国際看護演習を紹介してもらい説明を聞くとすごくワクワクしたのを覚えています。はじめての海外、不安や緊張も大きく無事に最後まで過ごせるか？勉強できるか？たくさんの葛藤もありましたが踏み出さなければ新しい世界は見えないと思い行くことを決めました。最後まで無事に…とか考える暇もなくあっという間に最終日を迎えました。長いようであるという間の一瞬の演習でした。ここまで早い1週間を過ごしたことがないぐらい早く、そして充実した内容の濃い1週間でした。行ってみて思ったこと。それは、はじめての第一歩は新しいことを知り新しい世界が見える第一歩であること。海外？台湾？など興味関心もなく日本という国で当たり前前に生活していた自分にとって海外を知ることは新しい日本を知ることにつながるのだと気づいた。日本では当たり前のように思っていたこと、考え方、社会の価値観などは海外では通用することもなく、その国では、その国特有の考え方がある。日本との違いは顕著にわかる。そして日本の特徴もはっきりわかる。そのような考え方は歴史や文化、その国の人々の特徴など様々な要素が絡み合い構成されていると考える。医療や看護は人を相手にする職業であるため人の特徴は医療や看護といったところで顕著に出現

すると考える。そのため医療や看護というものはその国を写し出すものであり、支援する者は支援するにあたりその国の特色について理解して支援する立場にならなければいけないと思った。その人にとってより良いを考え、看護を提供するにはそういった特色も要素の一つとして含める必要があると思った。

海外を見て国際交流をしたことで全く興味関心が無かった海外に対して興味が湧き、また都合があえば違う国にも行ってみたいと思った。世界は広く知らないことだらけで様々な新たな発見が出来ると思った。この写真は飛行機から撮った写真であり世界は広いと感じた写真です。



2231201 安達 爽那

台湾での国際看護研修を通して、医療や看護の仕組みが日本と大きく異なることに驚きました。台湾ではかつて漢方や民間医療が中心だったが、現在は近代医療が進み、AIを活用した効率的なシステムが導入されている病院も多かったです。検査や薬の管理が自動化されており、人手不足への対策として有効である一方で、機械に頼りすぎることへの危うさも感じ、医療現場における機械を使いこなす技術も必要であると学び、日本と同様に災害時に機械を使うことができなくなった時に医療が成立するのか、どのような災害対策をしているのか、必要なものが気になりました。

台湾の看護師は機能別看護で働くことが多く、健康教育や慢性疾患の予防にも関わっていたが、心理的支援が十分

に評価されていない現状もあると知りました。実習教育も日本とは異なり、アセスメントよりも手技を重視しており、現場ですぐに活かせる力を重視していることが印象的でした。今回の研修を通して、国によって医療の現状における課題の違いから看護の在り方が異なることを実感しました。

また、研修を通して台湾の文化や食事の違いや現地の方の温かさをととも感じました。良い経験になり、参加してよかったと思います。





## 2231204 井上 彩華

今回の研修を通して、宗教観や価値観の違いが看護の在り方に大きく影響することを実感しました。台湾では「健康的に過ごせる時間を長くすること」を重視しており、そのために看護の質を高めることが重要とされ、実習でも「技術面」に重点が置かれており、この点に日本との大きな違いを感じた。

また、台湾には保健師という資格がないことや助産師教育を受けられる大学も3校のみで、そのうち2校は大学院課程、1校は5年制で取得可能という制度であること、さらに国家試験が合格率が50%台と低いことから、教育制度の違いも学ぶことができました。大学の演習施設はリハビリ色が強く、日常生活の中でリハビリを意識した看護が行われていると感じました。

一方で、看護師の低賃金や試験の難しさによる深刻な人手不足があり、看護師の負担軽減のための浴室・トイレ設計や日本よりも業務のAI化が進められていましたが、災害時の対応に懸念を感じました。看護や教育の在り方が大きく異なる台湾で学び、文化にも触れることができたことは、非常に有意義な経験になりました。

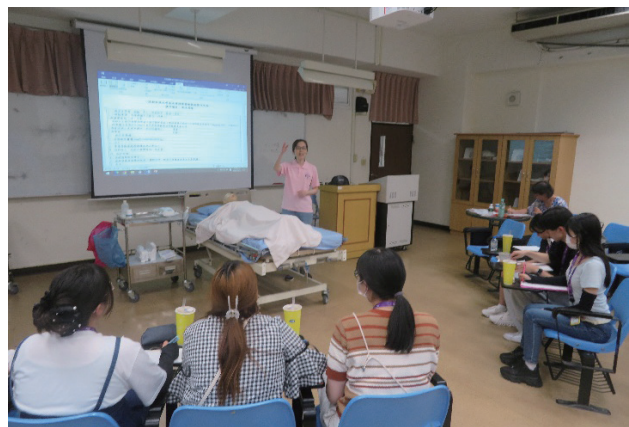


## 2231211 川村花佳

今回の国際看護論演習を通して、日本と台湾の文化、価値観の違いが医療に大きく関係しているのだと感じた。日本も台湾も看護師不足は同じだが、日本は看護師が少ないながらも安全に人の力を主力に医療を提供しているが、台湾ではAIと人の力を上手に両立させ、人手不足をAIで補っているということが分かった。また、家族を大切にするという文化、価値観から家族の看護はできるだけ家族がする、できないのであれば高額な医療費を払うという考えのため、医療の提供において家族が重要な役割を持っている

が、日本では家族はお手伝い程度にしか行わないため、医療の提供は看護師などの医療者が重要な役割である。日本は安全性だけでなく、患者の自尊心、自由を尊重する必要があるが、台湾では安全第一であるため、離床センサーの導入も一般的に行われていることを知ることができた。

台湾と日本では、文化や価値観の違いから看護の提供の方法は異なるが、互いの良いところをそれぞれに導入することでよりよい看護が提供できるようになると感じた。



2231215 小西 陽佳

台湾実習では、高齢者施設での利用者さんへの関わり方の違いが特に印象に残った。現地では看護師や介護職員の人数が限られているため、離床センサーや外に出ると音楽が流れる仕組みなど、日本では抑制と捉えられる可能性がある方法も、「利用者の安全を守るための工夫」として用いられていた。環境や人員配置が異なる中で、スタッフ一人ひとりが自国の制度の良さを理解し、状況に合わせたケアを実践している姿が印象的であった。また、台湾の人々は日本に対して親しみを持っており、実習期間中も「日本人に美味しいフルーツやタピオカを食べてもらいたい」



という温かい気持ちが伝わってきた。プライベートでも日本を訪れることが多いと話す人も多く、その言葉に私自身とても嬉しい気持ちになった。

一方で、台湾の方々が自国の魅力について自信を持って紹介する姿を見て、私は日本の良さを十分に発信できていないことに気づかされた。今回の実習を通して、自国の文化や価値観について理解を深めることの大切さを強く感じた。今後は、看護の場面だけでなく日常生活の中でも、日本の良さを自分の言葉で伝えられるようになりたいと考えた。



2231220 高村恋那

国際看護学実習を通して、日本と台湾の医療や看護の違いを多角的に学ぶことができた。台湾では現在リハビリ時に映像型トレーニングや、薬剤・血液の自動管理などあらゆる場でAIが活用し看護師不足の深刻状況を補い、円滑な医療提供が実現された。しかしAIを活用するその背景にはAIに頼ることで実際の患者さんの思いや僅かな変化を捉えにくくなり、個別性を重視した看護の実現が難しくなる可能性があると考えた。台湾における看護師は機械に依存しないよう注意を払い、状況を客観的に捉えるための観察力をより磨くことが重要になってくると考えた。

また日本では「家族に迷惑をかけたくない」という思いを抱く患者さんが多いが、台湾では「家族と共に」という文化が根づいており家族が車椅子移動や術後の搬送を担い、家族が積極的に日常的にケアに参加するという文化の違いが印象的であった。このことに限らず文化の違いを知ることはその人の大切にしたい事や何を望むかなどを知る

重要な要素となり、個別性を尊重した看護に繋げていくために大切になると考えた。





## 2231231 東口心葉

今回、台湾での国際看護研修を通して、医療がさらに発展していく過程にある中で、AI 技術を活用し、運動と遊びを組み合わせたりハビリなど日本ではあまり見られない新しい発想に触れることができ、とても貴重な経験となった。そして、台湾の看護では「患者の安全第一、できるだけ長く生きること」を重視しており、その方針のもとで身体拘束を減らすよりも、離床センサーなどの機器を積極的に導入している様子が印象的だった。また、ベッドサイドで音声操作によってカーテンの開閉や照明の調整ができるシステム、多機能型電子ホワイトボードによる患者情報の一覧管理など、看護師不足を補うための効率化の工夫が多く見られた。

一方で、日本の医療では「その人らしさ」や「倫理・プライバシーの尊重」を大切にしてきた視点から見ると、患者一人ひとりの思いや尊厳はどのように守られているのか、という疑問も浮かび、AI や機器が発達しても、患者と看護師の「心のつながり」がどのように維持されていくのかという課題を改めて感じた。

今回の学びを通して、社会人 1 年目として現場に出てからは、どんなに忙しい環境でも目の前の患者さんを一人の

人として見る姿勢を忘れずにいたいと思う。効率や制度に流されるのではなく、「この人にとって何が最善か」という視点を持ちながら、自分なりに考え、行動できる看護師を目指していきたい。



## 2231236 宮川美実

今回の演習では、台湾の文化や医学・看護について学ぶことができた。台湾の医学の発展には日本の統治が大きく関わっているが、台湾独自の文化と共に発展したため、医療・福祉の分野においても日本と異なっている部分が多くあることが分かった。産褥期のケアは産後の体を温めるために食べるものが決まっていることや、死後のケアでは台湾独自のタブーが多く存在するなどのことを学ぶことができた。また、日本のことについて話した際に「台湾にはない」と教えられ、日本独自のものであると気付くこともあ

り、改めて日本の文化を知る機会となった。

これからの世の中は、日本で看護師として働いていても日本人以外の方に看護をすることも当たり前になっている。日本では一般的なことであっても、相手にとっては受け入れがたいことかもしれない。日本の当たり前を強いるのではなく、相手のことの文化や気持ちを積極的に知ろうとすることを実践していく必要があると学んだ。





## 令和7年度 台湾文化交流研修を実施して

人間教育学部 准教授 山田 明広

2026年3月9日から14日の6日間に渡り、本学の台湾文化交流研修が実施された。本年度の研修には、人間教育学科5名、看護学科4名、計9名の学生が参加し、昨年度に引き続き、本学最初の海外提携校である国立屏東科技大学がその拠点となった。以下、まずは、今回の研修のプログラムを示し、その後、紙幅の関係上、全行程というわけにはいかないものの、本研修の大きな目的の一つである「交流」に関わるものを中心にいくつかの行程をピックアップしてその様子や状況について述べていきたい。

## 研修プログラム

## 第1日(3月9日):

午前 関西国際空港発

午後 高雄国際空港着

夕刻 屏東科技大学学生との顔合わせ会兼夕食

## 第2日(3月10日):

午前 竹田小学校訪問 → 旧竹田駅見学

午後 美和科技大学訪問・見学

## 第3日(3月11日):

午前 屏東科技大学外国人留学生との英語交流会

→ 屏東科技大学内幼稚園見学

午後 屏東科技大学日本語履修学生との日本語交流会

## 第4日(3月12日):

午前 屏東科技大学内景観レクリエーション管理研究所療養

庭園見学・創作体験

午後 福祉施設(屏東県多層級楽活照願服務園区) 見学

→ 病院(屏東榮民総医院) 見学

## 第5日(3月13日) エクスカーション:

午前 原住民文化園区参観

午後 駁二芸術特区参観

夕刻 六合夜市にて夕食兼買い物

## 第6日(3月14日):

午前 自由行動(一部の学生は蓮池潭にて観光)

午後 高雄国際空港発

夜 関西国際空港着

## 屏東科技大学学生との顔合わせ会

本研修での交流は、3月9日午前に日本を発ち、その日の夕刻ごろに屏東科技大学に到着するや否や早速スタートした。我々が屏東科技大学に到着すると、早速、学内の第1食堂へと移動し、そこで夕食を取りながら屏東科技大学の学生との交流を行った。学生はもちろんのこと、引率の身である私自身、学生同士がうまく交流できるか非常に心配であった。しかし、それはまったくの杞憂に終わった。屏東科技大学の学生が自身の知っている日本語や英語、さらにはボディランゲージ等を駆使して最初から積極的に本学学生に話しかけてくれ、本学学生も最初はいささか消極的な様子であったものの、その積極さに圧倒されて、そしておそらくは次第に自分たちも積極的に関わっていききたいと思うようになって、彼らの積極的な姿勢に何とか答えようとするようになり、中盤以降はお互いすっかり打ち解けあうことができていた。このように、研修冒頭から和気あいあいとした雰囲気の中、活気のある交流を行うことができた。

## 美和科技大学訪問

研修2日目(3月10日)の午後には、同じく屏東県に位置し、本学の提携校でもある美和科技大学を訪問した。我々一行が到着するや否や、学長や副学長をはじめ多くの役職者の方々が校門までお出迎えくださるなど、申し訳ないぐらいに歓迎していただいた。ここでは、看護学科を中心に関連施設を見学するとともに、体力測定や疑似老人体験、フィットネス施設体験など種々の体験を行ったが、学内には医学科等はなく、医療系は看護学科しかないものの、本物の人体を用いて作られた人体モデルを所有しており、それを見せていただけるという貴重な経験ができたのは、非常に

印象深かった。美和科技大学は、本年度、本学と提携を結んだばかりの大学ではあるが、本年度早速、本学の看護学科が訪問して国際看護論演習を行わせていただいているほか、この2月には看護学部の先生方が本学をご訪問くださっている。また、今年5月末にもご訪問いただけるとのことで、両学間の交流が今後ますます深まっていくことが期待される。

## 英語交流会、食文化交流、日本語交流会

研修3日目(3月11日)には、本研修のメインともいえる屏東科技大学学生との交流がほぼ丸1日に渡って行われた。まず、屏東科技大学にて中国語を学んでいる外国人留学生との英語交流会が行われた。ここでも、外国人留学生の皆さんが積極的に話しかけてくれ、本学学生たちも何とかそれに答えようと努力していたため、彼らが思っていた以上に意思疎通できたようであった。

お昼頃からは、「食文化交流」と題して、台湾の「飯湯(スープご飯)」と日本の「お茶漬け」の食べ比べをしつつ、屏東科技大学の学生の皆さんと交流した。この時には本学学生もすっかり台湾での交流に慣れてきたようで、両学学生同士が積極的にコミュニケーションを取りながら和気あいあいと交流が進められた。本交流会の様子は、翌朝には早速Facebookの屏東科技大学のページに詳細な解説文付きでアップされていた(<https://www.facebook.com/share/p/16zTSztaU8/?mibextid=wwXlfr>)が、そのスピードにはただただ驚かされるばかりであった。また、この記事を見て、本企画は屏東科技大学にて日本語を担当されている彭瓊慧先生によるものだと知ったが、食事を楽しみながら文化交流もできるという非常に興味深い企画で、本学でも是非ともやってみたいものである。

食文化交流が終わると、前述の彭先生ご担当の日本語の授業において、本授業を履修している学生と本学学生との日本語交流会が行われた。本学学生が日本に関する発表を行い、それに対して履修学生から質問をしてもらい、その質問に本学学生が答えるという形式で行われ、本学からは4つのグループがそれぞれ「日本の四季」や「日本の着物」、「日本の音楽」などのテーマで発表を行った。どの発表も盛況であったが、特に「日本の音楽」に関する発表では、急病のため残念ながら今回の研修に参加できなかった学生もZOOMによりオンライン参加し、歌を歌ったり、ギターを弾いたりするなどしたこともあり、大いに盛り上がった。後日、この交流会についての履修学生からのコメントを彭先生よりお送りいただいたが、その中に、「堂々と落ち着いた様子で発表していて、自身に満ち溢れているようで驚いた」といった内容のコメントがあった。本学では、教員や看護師といった人を相手とする職業人を養成するため、学生にはできるだけ現場経験を積ませたり、現場を想定した演習形式の授業を実施したりしているが、今回の日本語交流では知らず知らずのうちにその成果を示すことができたのかも知れない。

以上、「交流」に関わるものを中心に本研修について述べてきた。本研修を通して参加学生たちは、教員や看護師、特別支援、さらには音楽などそれぞれが現在学んでいる学問分野の立場から何らかの得るものがあったようである。また、ほぼ全員が、一様に、異なる言語話者同士のコミュニケーションにおいては、言葉を間違えることを恐れず、「相手に伝えたい」という気持ちと「相手を理解したい」という姿勢を持って積極的に臨むことが重要であるということも学んだようである。このように参加学生にとって、何らかの得るところがあり、研修の前と後とで考えに変化が見られただけでも、本研修は成功と言えるのではないであろうか。次年度以降も、改善すべき点は改善しつつ、続けていきたいものである。そして、本学の学生には、こういった研修などを通して異なる文化や価値観に触れる機会を持ってもらうことで、より一層国際交流に目を向け、少しでも国際的視野を身に付けてもらうことを願わんばかりである。



## 2026年 台灣文化交流研修實錄

人間教育學院 副教授 山田 明廣

2026年3月9日至14日為期6天，本校舉辦了台灣文化交流研修。本次共有5名來自人間教育學系、4名來自護理學系，共計9名學生參與，延續去年的模式，本校首所海外姐妹院校即國立屏東科技大學再次成為本次活動的基地。以下首先列出本次研修的行程安排，其後因篇幅所限，雖無法詳述全程，但將以本次研修主要目的之一「交流」為核心，挑選部分行程，並說明當時的情形。

### 研修行程

第1天 (3月9日)：

上午 自關西國際機場出發

下午 抵達高雄國際機場

傍晚 與屏東科技大學學生舉行見面會暨晚餐

第2天 (3月10日)：

上午 參訪竹田國小 → 參觀舊竹田車站

下午 參訪美和科技大學

第3天 (3月11日)：

上午 與屏東科技大學外國留學生進行英語交流會

→ 參觀屏東科技大學附設幼兒園

下午 與屏東科技大學修習日語學生進行日語交流會

第4天 (3月12日)：

上午 參觀屏東科技大學景觀暨遊憩管理研究所療養庭園

並創作體驗

下午 參觀福利設施 (屏東縣多層級樂活照護服務園區)

→ 參觀醫院 (屏東榮民總醫院)

第5天 (3月13日) 外遊行程：

上午 參觀原住民文化園區

下午 參觀駁二藝術特區

傍晚 於六合夜市享用晚餐並購物

第6天 (3月14日)：

上午 自由活動 (部分學生前往蓮池潭觀光)

下午 自高雄國際機場出發

晚間 抵達關西國際機場

### 與屏東科技大學學生的見面會

本次研修的交流活動，自3月9日上午從日本出發，當晚抵達屏東科技大學後便立即展開。我們一抵達屏東科技大學，便隨即前往校內第一食堂，一邊享用晚餐，一邊與屏東科技大學的學生進行交流。不僅是學生，身為率領人的我，也十分擔心學生們能否順利交流。然而，這完全是杞人憂天。屏東科技大學的學生從一開始便運用所知的日語、英語，甚至肢體語言等，積極主動與本校學生搭話，本校學生雖然起初略顯保守，但在對方積極態度的帶動下，或許也逐漸萌生了主動參與的意願，試圖回應對方的熱情，因此從活動中段開始，雙方便已完全打成一片。如此一來，自研修伊始便在和樂融融的氛圍中，進行了充滿活力的交流。

### 訪問美和科技大學

研修第二天 (3月10日) 下午，我們參訪了同樣位於屏東縣、且為本校姐妹校的美和科技大學。我們一行人甫抵達，校長、副校長

及眾多教職員便親臨校門迎接，受到如此盛情款待，令我們深感過意不去。在此校，我們以護理學院為中心參觀了相關設施，並進行了體能測驗、模擬老人體驗、健身設施體驗等各項活動。雖然校內沒有醫學系等科系，醫療相關領域僅有護理學系，但該校擁有以真實人體製作的人體模型，能親眼見證這份珍貴的體驗，令人印象深刻。雖然美和科技大學是2025年才剛與本校締結姐妹關係的大學，但2025年當年本校護理學院即已前往訪問並進行「國際護理理論演習」之課程。此外，今年二月護理學院的教師們也曾蒞臨本校訪問。據悉，他們預計於今年五月底再度來訪，未來兩校之間的交流可望日益深化。

### 英語交流會、飲食文化交流、日語交流會

研修第三天 (3月11日)，作為本次研修重頭戲的與屏東科技大學學生的交流活動，幾乎持續了一整天。首先，與在屏東科技大學學習中文的外籍留學生進行了英語交流會。在此過程中，外籍留學生積極主動與本校學生交談，本校學生也努力嘗試回應，因此雙方溝通的順暢程度似乎超出了他們的預期。

從中午起，以「飲食文化交流」為題，一邊品嚐台灣的「飯湯」與日本的「茶泡飯」進行比較，一邊與屏東科技大學的學生交流。此時本校學生似乎已完全適應台灣的交流氛圍，兩校學生積極互動，在和樂融融的氣氛中進行了交流。這場交流會的盛況，隔天早上便已連同詳細說明一併上傳至Facebook的屏東科技大學專頁 (<https://www.facebook.com/share/p/16zTSztaU8/?mibextid=wwXlfr>)，其速度之快，實在令人驚嘆。此外，透過這篇貼文得知，此活動是由在屏東科技大學擔任日語課的彭瓊慧老師所策劃。這是一項既能享用美食又能進行文化交流的極具趣味性的企劃，希望在本校也盡快嘗試舉辦。

餐食文化交流結束後，在前述彭瓊慧老師所負責的日語課當中，舉辦了修此課的學生與本校學生之間的日語交流會。活動形式是由本校學生進行關於日本的發表，修課生提出問題，再由本校學生回答。本校共有4組學生分別以「日本的四季」、「日本的和服」、「日本的音樂」等主題進行發表。每場發表都盛況空前，其中關於「日本音樂」的發表更是格外熱烈——因突發疾病而遺憾未能參加本次研修的學生，也透過ZOOM線上參與，現場不僅有歌唱表演，還有吉他彈奏等環節，氣氛十分熱烈。事後，彭老師轉發了修課學生對此次交流會的感想，其中包含「他們以沉穩從容的姿態進行發表，充滿自信的樣子令人驚訝」等內容。本校為了培養教師、護理師等專業人士，一直致力於讓學生儘量累積現場經驗，並實施模擬現場情境的演習課，我們在這次的日語交流中，或許不知不覺地展現出這些努力的成果。

以上，主要針對「交流」相關活動闡述了本次研修。透過本次研修，參與學生似乎皆從各自目前所學的領域，即為教育、護理、特殊教育，乃至音樂等，獲得了某些收穫。此外，幾乎所有學生皆一致體悟到在不同語言使用者之間的溝通中，重要的是不要害怕說錯話，而是懷抱著「想向對方傳達」的心情與「想理解對方」的態度，積極投入其中。如此般，只要參與學生有所收穫，且在研習前後的思維有所轉變，這項研習便已可謂成功。希望我們之後也能在改善應改進之處的同時，持續舉辦此項研習。此外，衷心期盼本校學生能透過這類研習，接觸不同文化與價值觀，進而更加關注國際交流，並儘量開闊國際視野。

## 台湾文化交流研修から学んだこと

人間教育学部 2411220 吉村 陽葉

今回は台湾文化交流研修という題で研修に参加した。研修では、現地の小学校の見学や福祉施設への訪問など、さまざまな体験を通して異文化理解を深める機会を得た。その中で私が最も学んだことは、コミュニケーションにおいて大切なのは言語の正確さではなく、「相手に伝えようとする姿勢」と「相手を理解しようとする意識」であるということである。

私はこれまでに、セブ島での1か月間の語学留学や、カンボジアでのスタディツアーに参加しており、今回が3回目の海外経験であった。これらの経験を通して毎回感じるのは、「自分にとっての当たり前は、決して当たり前ではない」ということである。今回の台湾研修でも、文化や価値観、生活習慣の違いに触れる中で、その考えを改めて実感した。

台湾の小学校を見学した際には、言語教育の環境が非常に充実していることが印象的であった。具体的には、1・2年生の段階から英語と中国語を学び、さらに3年生からは日本語サークルに参加することができるなど、複数の言語に触れる機会が整えられていた。このような環境は、日本の学校と比較しても特徴的であり、早い段階から多言語に触れることの重要性を感じた。一方で、今回の見学では実際に子どもたちが活動している様子を見る機会はなかったが、説明を通して教育に対する考え方や取り組みの違いを知ることができた。

また、福祉施設の訪問では、利用者一人ひとりの状態やニーズに応じた支援が行われていることが印象に残った。施設的环境づくりや支援の方法には、日本とは異なる工夫が見られ、同じ「福祉」であっても国によって多様なアプローチが存在することを学んだ。この経験を通して、一つの価値観にとらわれず、多角的に物事を捉えることの大切さを実感した。

特に印象的であったのは、日本と台湾における人との関わり方の違いである。日本では、周囲の空気を読み、相手に合わせて行動することが重視される文化があると感じている。そのため、他人の目を気にしすぎたり、自分の意見を控えてしまったりすることがある。一方で台湾の人々は、自分の考えや気持ちを比較的積極的に表現する傾向があり、間違いを恐れずにコミュニケーションを取ろうとする姿勢が印象的であった。この違いに触れたことで、周囲に配慮する日本の良さと同時に、自分の考えを表現することの重要性にも気づくことができた。

また、現地の方々との交流の中で、言語だけに頼らないコミュニケーションの大切さも学んだ。日本語や英語が十分に通じない場面でも、表情やジェスチャー、簡単な単語

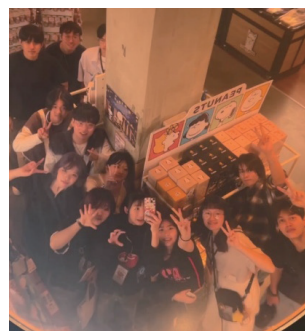
を用いることで、互いに理解しようとすることができた。言葉が完全でなくても、相手に関心を持ち、伝えようとする姿勢があれば、コミュニケーションは成立するということを実感した。

さらに、今回の研修を通して「好奇心を持つことの大切さ」にも改めて気づいた。未知の文化に対して不安を感じるのではなく、「知りたい」「理解したい」という気持ちを持つことで、より深い学びや交流につながると実感した。実際に、自分から積極的に関わろうとすることで、多くの気づきや学びを得ることができた。

また、今回の経験は、これまでのセブ島やカンボジアでの体験を振り返る機会にもなった。これまでは「英語を使うこと」に意識が向きがちであったが、今回の研修ではそれ以上に「相手と関わろうとする姿勢」が重要であると気づいた。この気づきは、これまでの経験をさらに深めるものであったと感じている。

今回の台湾文化交流研修を通して、私は自分から行動することの重要性も学んだ。最初は緊張や不安もあったが、自分から関わることで相手との距離が縮まり、より深い理解につながることを実感した。受け身ではなく、自ら関わろうとする姿勢が、異文化理解を深めるうえで重要であると感じた。

今後は、周囲に配慮する日本の文化の良さを大切にしながらも、自分の考えを相手に伝える力を身につけていきたい。また、相手を理解しようとする姿勢を忘れず、異なる文化や価値観を持つ人々とも積極的に関わっていきたい。そして、好奇心を持って新しいことに挑戦し続けることで、自分自身の視野をさらに広げ、成長していきたい。





## 台湾文化交流研修を終えての学び

人間教育学部 2411211 永田 ほのか

台湾文化交流研修に参加するにあたって、3つの目標をもって取り組んだ。

1. 台湾の教育について学ぶこと
2. 自分から積極的に行動し、挑戦すること
3. 自分の視野を広げること

本レポートでは、台湾文化交流研修での経験や学びなどを述べていく。

今回の研修では、屏東科技大学の学生との交流を中心に、竹田国立小学校・美和科技大学・幼稚園・管理研究所療養庭園・福祉施設・病院の見学、英語での国際交流、食文化の交流会、日本語交流会、台湾原住民族文化園区でのエクスカージョンなどを行った。

私は特別支援教育に興味・関心があり、現在、副免許で特別支援について学んでいるため、教育や特別支援教育の視点での気づきが多くあった。

台湾と日本では特別支援教育に対する考え方に違いがあった。台湾の幼稚園では、入園希望者が定員より多かった場合には、抽選が行われる。その際に、特別な支援を必要としている子どもは優先で入園することができるという政府が決めている。日本では、そのようなことはない。仮に、特別な支援を必要としている児童は優先で入園することができるとした場合、日本では、反対の意見が出てくるのではないかと考える。これは、日本が悪いというわけではなく、台湾と日本の特別な支援を必要としている者に対する考え方の違いであり、それぞれの考え方を否定せず、尊重していく姿勢が大事だと考える。また、台湾の幼稚園では自分の写真を使った小さいアクリルスタンドのような物が使われていた。それは、自分が遊びたい遊び場に持っていく、場所を予約したりするときに使うので、自分がしたいことをやるという自分の考えを持つことができるようになっていないのかと考える。

管理研究所療養庭園では、園芸療法に興味・関心を持った。園芸療法は園芸とは違っている。園芸は、景観庭園や農場で行われ、庭園で感じることや収穫・販売を目的としている。一方で、園芸療法は療養庭園で、主に特別な支援を必要としている人や精神疾患のある人に対して補助工具を使い、収穫を目的とせず育てていく過程で得られる様々な効果を重要視して行われている。例えば、自然とかかわることでもリラックスできたり、植物を育てていく上で見通しを持って活動ができるようになったりするといった、心理・生理・認知・社交など多くの効果がある。園芸療法では、様々な工夫があった。高さの違うプラ

ンターを組み合わせることで作業できるプランターや椅子の高さを少し高めにして座面の奥に芝生を敷くことで、後ろに手をついたときに自然と土に触れることができるようになるなどがあった。私は、小学校の生活科で行っているのは園芸であると考え、今回の研修で学んだ園芸療法の自然とのかかわり方や育てていく過程での効果も意識して教員として授業を行っていきたいと考える。さらに、園芸療法について今後も学び続けたい。

特別支援教育以外の視点での学びも多くあった。その中でも、交流に関して気づいたことがある。屏東科技大学の学生や先生方との交流などを通して、コミュニケーションを取る上で大事なことは、言語ではなく、どれだけ相手のことを知りたいと思うのか、話したい・通じ合いたいと思うのかといった気持ちが大切であるということである。もちろんお互いの言語を理解して話す方がコミュニケーションは取りやすいかもしれない。しかし、たとえ言葉が十分に通じ合えなくても、相手に関心を持ち、積極的に関わろうとする姿勢があれば、思いは伝わり、より良い関係を築くことができると感じた。この経験を通して、コミュニケーションの本質は言語能力だけでなく、人と人との繋がりを大切にする気持ちであると学んだ。

最後に、今回の台湾文化交流研修では、最初に掲げていた3つの目標のいずれにおいても、大きな学びを得ることができた。

現地での学校見学や交流を通して、台湾の教育や特別支援教育への理解を深めるとともに、その考え方の違いに触れ、それぞれの価値観を尊重することの大切さを学んだ。また、園芸療法や現地での実践的な取り組みから、一人ひとりの特性や思いに寄り添った支援の在り方について深く考え機会となった。さらに、異なる文化や価値観に触れる中で、自分自身の視野が広がったことを実感している。

台湾文化交流研修全体を通して、コミュニケーションにおいて最も重要なのは言語ではなく、相手を理解しようとする姿勢や思いであることに気づいた。これらの学びを今後の大学での学習や将来の教員としての実践に生かしていきたいと考える。



## 台湾研修で学んだこと

人間教育学部 2411223 大久保 ひなた

今回、研修に参加した目的は、他国の方とコミュニケーションをとることである。先日まで来ていた聴講生の方と交流する中で、異なる文化を持つ人々とさらに関わりたいと考え、今回の研修に参加した。

研修1日目の夜には、台湾の学生の方々と夕食をとりながら交流する機会があった。最初はうまく話せるか不安であったが、台湾の学生の方々が日本語で積極的に話しかけてくれたため、円滑に交流を始めることができた。

また、英語での交流も行ったが、私は英語に苦手意識があり、この活動に最も不安を抱いていた。日本では英語を実際に使う機会が少なく、「間違えたら恥ずかしい」「完璧に話せなければ伝わらない」という意識から、英語を使うことへの心理的なハードルが高くなりやすい。私自身もその一人であった。しかし実際には、知っている単語やボディランゲージを用いることで、十分に意思疎通が可能であった。現在は翻訳機も活用できるため、以前より外国語でのコミュニケーションに取り組みやすい環境が整っているといえるであろう。

一方で、翻訳機のみでは十分ではない。言葉を訳すことはできても、その背景にある文化、価値観、歴史的背景まで理解できるとは限らないからである。相手とより深く交流するためには、言語そのものだけでなく、その国や地域に対する関心と理解が必要である。言語学習は単なる知識の習得ではなく、その国について知ろうとする姿勢と結び

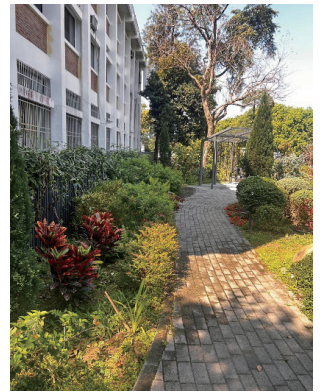
ついていることが分かった。

大学見学の中で特に印象に残ったのは、屏東科技大学で教えていただいた園芸治療である。園芸治療とは、植物に触れ、見たり香りを感じたりしながら、五感を通して心身の安定を



図る取り組みである。実際に、花やハーブが植えられた空間や、水の流れる落ち着いた環境が整えられていた。また、精神的な悩みを抱える学生が育てているプランターもあり、植物を育てる活動がこころのケアの一つとして位置づけられていた。

この取り組みは、日本の学校教育にも応用できる可能性がある。日本では小学校低学年の生活科で植物を育てる機会はあるが、それ以降は自然に触れる機会が減少しやすい。授業の中に自然に触れる活動を取り入れることや、学校内に心を落ち着かせる空間を設けることは、子どもたちの心の安定や環境づくりの面で意義がある。近年は日本でも精神的な不良の低年齢化が課題となっており、こうした視点は学校教育においても重要である。



今回の研修を通して、私はコミュニケーションにおいて大切なのは、完璧な語学力だけではなく、相手を知ろうとする気持ちや、積極的にかかわろうとする姿勢であることを学んだ。また、異文化に触れることで、その国の人々の考え方や学びの在り方、心身の健康への向き合い方など、日本とは異なる様々な視点を知ることができた。特に、台湾の学生の方々が日本の文化に関心を持ち、日本語を学んで交流してくれていた姿を見て、私自身も相手の国に興味を持ち、より深く学んでいきたいと強く感じた。





## 台湾文化交流研修レポート

人間教育学部 2511512 松室 賢大

今回、台湾文化交流研修という形で海外に行ったが、これは私にとって初めての海外であった。どんな研修になるのか全く分からない緊張や不安もありながら飛行機に乗ったが、予想をはるかに超えた楽しさと経験を手に入れることができ、今でも驚いている。

今回の研修で私が得た一番大きなものは明らかに「経験」であり、将来に生かすことのできるものである。経験という言葉は範囲が広すぎるのでもう少し細かく言うと、①初めて日本から出て感じた世界の広さ、②国籍の違うみんなと交流して友達になったという思い出、そして③施設見学で得た学びなどである。

①については台湾に行く前は「正直ずっと日本にいれば間違いないだろう」「海外に行くのは怖い」という思いがあった。しかし、いざ台湾に行ってみればそんな思いはすっかり消え、台湾に戻りたいという気持ちばかりである。台湾で様々な人、文化、歴史があることを学び、世界には台湾以外にも様々な国がある中で、日本で感じていた世界が広いという感覚とは全く別の世界が広いという感覚を感じることができた。

文字からなんとなくの意味を推測することができたり、日常生活でも日本と似たような部分も結構あったが、道路の走行方向やバイクの多さ、台湾の法律など日本とは全く違う箇所もあり、おもしろいなと感じた。

②については初めての経験であり、この経験が今後一番生きるのではないかと思う。初めて国外の人間とまともな交流をし、友達になった。それも、思っていたより多くの友達を作ることができた。1時間ほどしか交流できなかった友達もいるが、それよりももっと長い時間関わったのではないかと思うほど仲良くなれた。台湾で出会った友達は一生の友達になるのではないかと思っている。



③については、小学校や看護施設など様々な場所を見学した。その中でも最も印象深かったものは竹田小学校の見学である。

竹田小学校は日本統治時代に軍の病院として使われていた。その面影が小学校にも残っており、とても考えさせられる場所であった。

今回日本人として台湾に行っているが、我々の先祖がもともと統治していた場所であるということを忘れてはならない。

そして台湾は現在の中国との関係や日本との関係を見てもとても歴史的な場所である。台湾でできた友達と台湾の歴史の話や政治的な話もすることができたので、それの一つ大きな学びとなった。

これらの経験から、何事にも恐れず、経験してみるということが大切だということが分かった。今回の台湾研修も、海外に行くということを恐れて何もせずにいればこのような人生で1度あるかないかである貴重で素晴らしい経験はできていない。

台湾のみんなが私たちを快く歓迎し、受け入れてくれたことに心から感謝している。



## 台湾文化交流研修レポート

人間教育学部 2511505 佐名木 麗

私は今回の台湾研修旅行を通して、異文化への理解を深めるとともに、人との交流の大切さを実感することができた。これまで台湾については観光地や食文化の印象が強かったが、実際に現地を訪れ、人々と直接関わることで、台湾をより身近に感じるようになった。

特に印象に残ったのは、台湾の人々の親切さである。日本語交流の場面では、うまく言葉が出てこず困っていると、台湾の学生が気さくに話しかけてくれ、会話を続けられるようにサポートしてくれた。言語の違いがあっても、相手に寄り添い理解しようとする姿勢に温かさを感じ、コミュニケーションにおいて最も大切なのは語学力だけではなく、相手を思いやる気持ちであると学んだ。

さらに、今回の研修では台湾人の学生と交流する中で友達ができただけでなく、大きな思い出となった。最初は緊張していたが、一緒に話したり写真を撮ったりするうちに自然と打ち解けることができた。また、音楽を通して交流する場面では、好きな音楽について話したりすることで、言葉の壁を越えて仲良くなることができた友達もいた。この経験から、音楽には国や地域、言語の違いを越えて人と人とを

結びつける力があり、音楽は世界を繋ぐ存在であると感じた。

また、夜市や街の様子からは、日本とは異なる生活文化を感じることができた。多くの人々が活気ある空間で食事や買い物を楽しみ、人と人の距離の近さや社会全体の温かい雰囲気印象的であった。ここで食べた精進料理も非常に印象に残っている。こうした日常の風景から、その国の文化や価値観が形づくられていることを実感した。

今回の研修を通して、台湾は単なる旅行先ではなく、人とのつながりを感じられる魅力的な場所だと感じるようになり、台湾のことが以前よりも好きになった。現地ですれ違った友達との交流は、異文化理解の楽しさと大切さを教えてくれる経験となった。

この経験を今後の生活や学習にも活かし、異なる文化や価値観を尊重しながら積極的にコミュニケーションを取っていききたい。また、日本文化についても改めて見直し、互いの文化を理解し合える視点を持ち続けたい。台湾研修旅行は、自分の視野を広げ、人との出会いの価値を実感できた非常に有意義な学びの機会であったと私は感じた。





## 台湾研修で得た学びと コミュニケーションの重要性

保健医療学部 2531142 森島 羽子

今回の台湾研修を通して、私は言語交流や異文化交流の大切さ、そして自分自身の課題について深く学ぶことができた。特に印象に残っているのは、台湾の学生とのコミュニケーションを通して、自分の内向的な性格を改めて実感したことである。

現地での交流の中で、会話が途切れてしまう場面が何度かあった。そのような時、日本では沈黙が続くことも少なくないが、台湾の学生は違っていた。少しでも沈黙が生まれると、自分から積極的に話題を見つけ、会話を続けようとしてくれたのである。その姿勢に触れ、コミュニケーションとは受け身であるものではなく、自ら関わろうとする姿勢が重要であると強く感じた。この経験は、将来看護師として臨床の現場に出た際にも大いに活かせると考えている。看護師という職業は、患者さんやその家族、多職種の医療スタッフとのコミュニケーションの上で成り立っている。そのため、自分の性格を理由に関わりを避けるのではなく、相手に寄り添いながら積極的に関わる姿勢が必要であると学んだ。

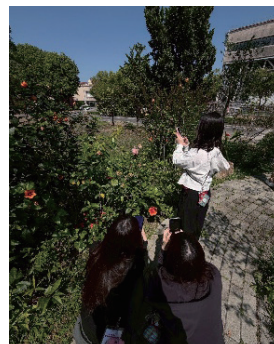
また、管理研究所療養庭園の見学も非常に印象的であった。そこでは、植物や花を育てる過程そのものを精神疾患の治療として取り入れており、種子から花が咲くまでの成長を見守ることで、患者の心の安定や回復を促していた。私はこれまで、花や植物は観賞するものという認識しか持っていなかったため、医療の一環として活用されていることに驚きを感じた。特に、時間をかけて成長していく過程に関わることで、患者が達成感や生きがいを感じられる点に大きな意義があると感じた。

日本における精神疾患の治療は、主に薬物療法やカウンセリングが中心である。カウンセリングは対話を通して行われるため、対人コミュニケーション

に不安や恐怖を抱えている患者にとっては、負担となる場合もあると考えられる。その点、台湾で行われているような園芸療法は、言葉によるコミュニケーションが難しい患者や、薬に頼らない治療を希望する患者にとって、新たな選択肢となり得るのではないかと感じた。もしこのような治療法が日本でも広く取り入れられれば、より多様なニーズに応じた精神医療が提供できるのではないかと考える。

さらに今回の研修を通して、自分の中にあった固定観念が大きく変化した。これまでは、育った環境や言語、文化が異なると、互いに理解し合うことは難しいのではないかと無意識に感じていた。しかし実際に現地で交流を重ねる中で、その考えは大きく覆された。言語が完全に通じなくても、相手を思いやる気持ちや理解しようとする姿勢があれば、十分に心を通わせることができると実感した。

この経験から、看護においても同様に、相手の背景や価値観を尊重し、寄り添う姿勢が重要であると学んだ。患者一人ひとり異なる人生を歩んできており、感じ方や考え方も様々である。そのため、画一的な対応ではなく、個々に応じた関わりが求められる。今回の台湾研修で得た学びを今後の学習や実習に活かし、相手に寄り添える看護師へと成長していきたいと考えている。



## 台湾文化交流研修レポート

### —台湾研修を通して学んだ異文化交流と多様な学び—

保健医療学部 2531101 東 咲希

今回5泊6日の台湾研修に参加し、屏東科技大学での学生交流や施設見学、文化体験を通して多くの学びを得ることが出来た。私的に本研修の目的は、海外の文化に触れることで視野を広げるとともに、現地の学生との交流を通して異文化理解を深めることであった。日本とは異なる文化や価値観に触れることで、自分自身の考え方やコミュニケーションのあり方について改めて考える貴重な機会となった。

まず印象に残っているのは、屏東科技大学の学生との交流である。交流の場では主に英語を用いて会話をを行ったが、言語の違いから自分の思いを十分に伝えることが難しい場面がたくさんあった。しかし、表情や身振り素振りなどの考えや気落ちを理解し合うことが出来た。また、台湾の学生はとても親切で積極的に話しかけてくれ、観光地を案内してくれるなど、温かく迎え入れてくれた。その姿勢から、言語の正確さだけではなく、相手に伝えようとする姿勢がコミュニケーションにおいて重要であると感じた。

さらに、台湾の医療施設や福祉施設を見学した場面では、日本との違いについてたくさんのことを学ぶことができた。医療施設では、病院内に専門医薬品や医療ケアに必要なとされる専門道具を取り扱っている薬局や、地下にはレストラン街のようなものが併設されており、患者や家族が利用しやすい環境が整備されていたことが印象的であった。また、ワクチン接種などの注射を打たないといけない

患者のためだけの専用の待合室が設けられているなど、医療の効率性や安全性を考えた工夫が見られた。福祉施設では、高齢の方が安心して生活できるように環境が整えられており、作業療法や理学療法士など多職種が連携して支援を行っていることなども学んだ。こうした施設見学を通して、医療や福祉のあり方は国や社会の制度、文化によって異なることを実感した。

また、食文化交流も印象に残った体験の一つである。日本のお茶漬けと台湾のお粥を紹介し合い、それぞれの食文化の違いについて知ることが出来た。一見似ている料理であっても、味付けや食べ方、背景にある文化は異なっており、食を通してその国の生活や文化を理解することが出来ると感じた。このような文化交流は、互いの文化を尊重し理解するうえで非常に重要であると感じた。

今回の研修を通して、文化や価値観の違いを知ること、自分自身の考え方を見つめ直すきっかけになると感じた。また、言語の壁にとらわれるのではなく、相手を理解しようとする気持ちがコミュニケーションにおいて重要であることを学んだ。この台湾研修で得た経験は、今後の学習や将来の進路においても大きな意味を持つと感じている。今回の経験を大切にしながら、異なる文化や価値観を尊重し、多様な人々と関わることでできる人間へと成長していきたいと考えている。





## 台湾文化交流研修レポート

保健医療学部 2531202 安宅 杏里彩

今回の台湾研修を通して、私は多くの新しい気づきと学びを得ることができた。まず印象的だったのは、日本のアニメや音楽などの文化が台湾で広く知られていたことである。現地の学生の多くが日本の作品やアーティストについて知っており、共通の話題として会話が弾んだ。そのことがとても嬉しく感じられ、日本の文化が海外に広がっていることを実感するとともに、自分自身も他国の文化についてもっと知りたい、触れてみたいという思いが強くなった。

また、今回の研修で関わった学生たちの多くは、中国語に加えて日本語や英語など、複数の言語を話すことができた。そのため、言語の壁を越えてコミュニケーションを取ることができ、国を超えたつながりを築くことができた。これまで私は、翻訳機などが発達している現代において、英語を学ぶことにどれほどの意味があるのか疑問に思うこともあった。しかし実際に現地で、自分の拙い英語が翻訳機を使わずに相手に伝わったとき、大きな喜びと達成感を感じた。この経験を通して、言語を学ぶことの価値を改めて実感し、今後は英語だけでなく多言語にも積極的に挑戦したいと強く思うようになった。

さらに印象に残っているのは、台湾の人々の前向きなコミュニケーション姿勢である。それは単に言語能力の高さだけでなく、相手と関わろうとする積極性や温かさに表れていた。私はもともと自分から人に話しかけることがあまり得意ではなく、どちらかといえば消極的な性格である。しかし、現地の学生たちはそのような私にも積極的に声をかけてくれ、台湾の魅力を伝えようとしてくれた。その明るさや優しさに触れたことで、自然と心が開かれ、楽しく充実した時間を過ごすことができた。5泊6日の研修はあっという間に感じられ、毎日が新鮮でかけがえのない経験となった。

今回の研修を通して、私は海外に対して抱いていた不安や恐れが大きく軽減された。そして、もっと多くの国を訪れ、さまざまな文化や人々に触れてみたいという気持ちが芽生えた。新しい環境に積極的に飛び込み、自分の視野を広げていきたいと感じている。この経験を今後の学びや将来に活かしていきたい。



## 台湾の研修で学んだこと

保健医療学部 2531201 青柳 美来

今回の台湾研修を通して、私は異文化理解とコミュニケーションの重要性、そしてそれらが看護にどのような影響を及ぼしているのかについて深く学ぶことができた。これまで私は日本の中で生活することがほとんどであり、異なる文化や価値観に触れる機会はあまり多くなかった。そのため、自分の中の当たり前が他の国でも通用すると思っていた部分があった。しかし、実際に台湾で生活し、現地の人々と関わることで、自分の視野の狭さに気づき、相手を理解しようとする姿勢の大切さを強く実感した。

まず印象的だったのは、台湾の人々の明るさと優しさである。初対面であっても笑顔で接してくれる人が多く、言葉が完全に通じなくても温かく受け入れてくれた。そのような経験から、言葉以上に表情や態度が相手に与える影響の大きさを感じた。看護の現場においても、患者は不安や緊張を抱えていることが多いため、優しい声かけや落ち着いた態度、笑顔で接することが安心感につながると考える。今回の経験は、患者さんとの信頼関係を築く上で大切な姿勢を学ぶ機会となった。

また、日本語を学んでいる台湾の学生との交流も非常に印象に残っている。彼らは日本語がとても上手であるだけでなく、完璧ではなくとも積極的に話しかけてくれた。その姿から、コミュニケーションにおいて最も重要なのは、言葉の正確さではなく「相手に伝えたい」という気持ちであると学んだ。自分自身は間違えることを恐れて消極的になってしまう場面もあったが、相手の姿勢を見て、失敗を恐れずに関わることの大切さに気づいた。看護においても、患者さんとの関係づくりには積極的に関わる姿勢が必要であり、言葉だけでなく表情やジェスチャーなども活用しながら相手に寄り添うことが重要であると感じた。

さらに、研修では本物の人体模型を見学する機会があり、教科書だけでは得ることのできない貴重な学びを得ることができた。実際の人体構造を自分の目で確認することで、臓器の位置や大きさ、つながりをより具体的に理解することができた。このような体験は、今後の解剖学や看護技術の学習において大きな助けになると感じている。また、本物を見ることで命の重みを実感し、看護職として人の命に関わる責任の大きさについて改めて考えるきっかけとなった。

加えて、介護施設や病院を訪問した際、看護師の数が減っているという現状を知ったことも強く印象に残っている。この状況は日本でも問題となっており、台湾も同じ課題を抱えていることに気づいた。人手が不足している中でも、看護師の方々は患者さん一人ひとりに丁寧に接しようとし

ており、その姿勢に強い責任感を感じた。忙しい中でも患者に寄り添う姿は、看護師としての理想の在り方であると感じ、自分もそのような存在になりたいと思った。

また、台湾でも日本と同様に、患者さんの自尊心を大切にしていると感じた。プライバシーへの配慮や、患者さんの気持ちを尊重する姿勢は、文化が違っても共通して重要であることを学んだ。看護においては、患者を一人の人として尊重し、その人らしさを守ることが大切である。今回の経験を通して、ただケアを行うだけでなく、相手の尊厳を守ることの重要性を改めて認識した。

さらに、「第3の人生」を歩んでいる人の話を聞いたことも印象的であった。その方は新しいことに挑戦し続け、自分らしい生き方を大切にしていた。この経験から、人それぞれに異なる人生観や価値観があることを学び、それを尊重することの大切さを感じた。看護師として患者さんと関わる際には、その人のこれまでの人生や背景を理解し、一人ひとりに合った関わりを行うことが求められると考える。

今回の台湾研修を通して、コミュニケーションとは単に言葉を交わすことではなく、相手を思いやり、理解しようとする姿勢そのものであると学んだ。そしてその姿勢は看護において非常に重要であると感じた。今後はこの経験を活かし、患者さん一人ひとりに安心感と信頼を与えられる看護師を目指していきたい。





## 中国と日本の保健医療の特徴

PPT

黒龍江東方学院 許 姝婷



### 中国と日本の保健医療の特徴

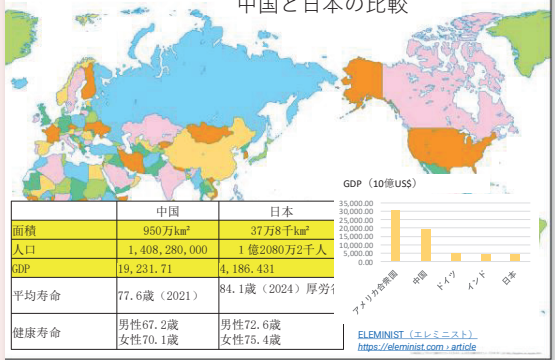
—文献レビューによる高齢化と在宅ケアからみた研究の特徴と課題に対する対応—

奈良学園大学  
許 姝婷  
Xu Shuting

### 研究目的

本研究では、中国と日本における保健医療の特徴を明確にし、文献検討から医療の課題を明らかにして、さらに高齢化と在宅ケアからみた研究の特徴と課題に対する対応について明らかにすることを目的とする。

### 中国と日本の比較



### はじめに

筆者は、中国の医療制度に興味があり、日本に来て、日本の医療制度にも関心を持った。中国では、地方の医療費には、病院の大きさや、地方（農村）と都会では医療に違いがある。日本ではどうなのか、こういった問題、医療問題、医療制度の両国の違いを明らかにしたいと考えた。

### 研究方法

中日の医療保健の特徴について文献により現状分析と研究の特徴から今後の両国のこれからの保健医療について言及した。

- 1 研究デザイン：文献レビュー（文献探索研究）
- 2 文献の抽出方法
- 3 方法

本研究は、中国の保健医療に関する統計データを中心に官公庁の資料、文献より特徴をまとめ、次に文献より研究の特徴を調べた。第1段階では両国の保健医療の特徴を、第2段階では、第1段階で得た文献の高齢化と在宅医療に焦点をあて調べた。

#### 1 研究対象とする文献について

両国の保健医療の特徴については、文献と政府関係の資料をもとにまとめた。具体的には、中国と日本の保健医療制度に関する文献を次のように調べた。医学中央雑誌Web版、Ciniiによる文献検索、Google Research、中国と日本の保健医療に関する書籍、行政機関の出版物（厚生労働省、WHO等）、Web情報（官公庁関連の公式ホームページ）の中から抽出した。

	保険制度	外来時の自己負担
中国	<b>公的医療保険制度</b>  都市職工基本医療保険（強制加入）： 都市で働く会社員（農村戸籍者も含む）、自営業者、公務員が対象	地域ごとに制度の運営方法が異なるため、給付限度額・自己負担割合などが異なる。また他地域で受診する場合は原則全額自己負担（一部償還も可能）
	都市・農村住民基本医療保険（任意加入）： 高齢者、非就労者、学生・児童、農村部住民、都市職工基本医療保険の被保険者に扶養されている家族が対象	
日本	国民皆保険制度：国民全員が対象	原則3割負担  年齢や所得によっては1割、もしくは2割負担

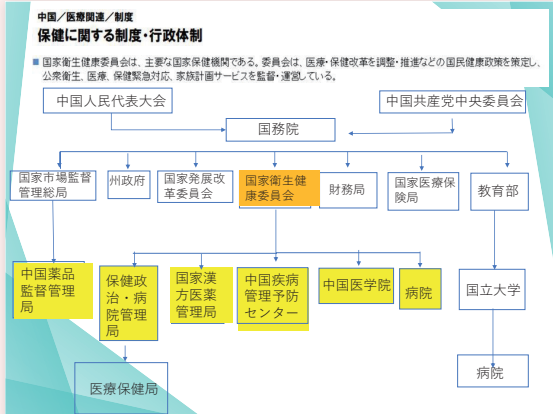
### 中国の基本医療保障制度に関する法律・政策一覧

Annex 1: Laws and policies on China's basic medical security system

Name of the law/document	Released by	Year of enactment	Key implications for the reform
Social Insurance Law	Standing Committee of the National People's Congress (NPC)	2010	Forming a legal base for basic medical insurance
Opinions on integrating the basic medical insurance system for urban and rural residents	The State Council	2016	The merger of URBMS and NRMS into RBMS
Opinions on strengthening the public provision of the basic universal reformed compulsory procurement and use of medicines	NHSA and eight other ministries	2019	Expanded service coverage and medical groups of medicines
Opinions on fully promoting the merger of maternity insurance and basic medical insurance for employees	General Office of the State Council	2019	The merger of maternity insurance and EBMS
Circular of the list of pilot cities for expansion-related cross-province	NHSA and 3 other ministries	2019	Launch of DRG payment pilot programs
Circular of further improving the direct settlement of cross-provincial medical expenses covered by basic medical insurance	NHSA and the Ministry of Finance	2022	On-the-spot settlement of cross-provincial medical expenses
Guidelines on improving the long-term mechanism for basic medical insurance settlement	General Office of the State Council	2024	Improving the structure and the quality of basic medical insurance services
Circular of steadily expanding the types of outpatient chronic and special diseases covered by direct settlement of cross-provincial medical expenses	General Office of the NHSA, in cooperation with the General Office of the Ministry of Finance	2024	Expanding the coverage of outpatient chronic and special diseases under on-site, cross-provincial settlement, and enhancing the effectiveness of administrative services

### 中国の基本医療保障制度に関する法律・政策一覧

法律・文書名	発布機関	公布年	主な改革上の意義
社会保険法	全国人民代表大会常務委員会 (NPC)	2010年	基本医療保険の法的基盤を提供
基本医療・健康促進法	全国人民代表大会常務委員会	2020年	国民の医療に関する権利義務を明確化
医療保障法（意見募集稿）	国家医療保障局 (NHSA)	2020年	医療保障に関する包括的な基本法（公布待ち）
都市職工基本医療保険制度の確立に関する決定	國務院	1998年	都市職工医療保険制度の確立
新型農村合作医療制度の確立に関する決定	國務院	2003年	新型農村合作医療制度の確立
農村医療救助制度実施に関する意見	民政部など	2003年	農村医療救助制度の確立
都市医療救助試行に関する意見	國務院	2005年	都市医療救助制度の創設
都市住民基本医療保障試行方案に関する指導意見	國務院	2007年	都市住民基本医療保障制度の確立
都市・農村住民重大疾病保険制度の発展に関する指導意見	国家発展改革委員会など2部門	2012年	重大疾病保険制度の確立
医療救助制度の改善と重大疾病医療救助の推進に関する意見	國務院	2015年	医療救助制度の改善
都市・農村住民重大疾病保険制度の全面実施に関する意見	國務院	2015年	重大疾病保険制度の全面的な実施



## 中国の医療関連施設

▶ Annex 2: Overview of medical and healthcare institutions in China in 2022 and 2023

Type of institution	2022	2023
<b>Total</b>	<b>1,632,118</b>	<b>1,676,785</b>
<b>Hospitals</b>		
Public hospital 公立病院	36,976	38,395
Private hospital 私立病院	11,746	11,772
Tertiary hospital 三級病院	25,230	26,583
Secondary hospital 二級病院	3,523	3,855
Primary hospital 一級病院	11,145	11,946
Unclassified hospital	12,815	13,252
Unclassified hospital	9,493	9,302
<b>Primary medical and healthcare institutions</b>	<b>979,768</b>	<b>1,016,238</b>
Community health centre 街道社区卫生服务中心	18,353	19,070
Community health clinic クリニック	28,095	27,107
Township health centre 保健センター	33,917	33,753
Village clinic (村) タウニック	582,749	581,064
Medical room (infirmary) 診療所	282,386	318,038
<b>Specialized public health institutions</b>	<b>19,438</b>	<b>12,121</b>
Centre for disease control and prevention 疾病预防控制中心	3,386	3,426
Institute for specialised disease control 专科预防中心	856	823
Maternal and child health institution 妇幼保健机构	3,031	3,063
Health inspection institute (centre) 卫生监督中心	2,944	2,791
Family planning technical services 计划生育技术服务	787	473
Other institutions	3,738	4,071

三級病院500床以上  
(3,523) 施設、  
二級病院100~499床  
(11,145) 施設  
一級病院20~99床  
(12,815) 施設

### 中国の公的医療保険制度の概要

中国の公的医療保険制度は、以下の3つで構成されています。(新型農村は都市住民の内容へ統合とされる予定)

	都市従業員 基本医療保険制度	都市住民 基本医療保険制度 <sup>(R1)</sup>	新型農村 合作医療制度 <sup>(R2)</sup>
加入人数 (万人)	3億2,926万人 (強制加入)	10億2,510万人 (任意加入)	
被保険者 資格	企業に勤務する都市従業員 (定年退職者含む)	都市従業員基本医療保険制度に 加入していない非従業員	農村部の住民 (農村戸籍)
給付の 種類	個人口座 (個人積立) と 基金 (社会保険方式) からの 給付のみ	基金 (社会保険方式) からの 給付のみ	基金 (社会保険方式) からの 給付のみ
給付対象	入院費用、外来費用	入院費用、外来・急患費用	入院費用と高額医療外来費用
財源	・企業負担: 賃金×6.0%以上 ・個人負担: 賃金×2.0%	・政府負担: 年間550元/人以上 ・個人負担: 年間280元/人以上	・政府負担: 年間10元/人以上 ・個人負担: 年間10元/人以上 ・集団組織負担: 県政府が規定

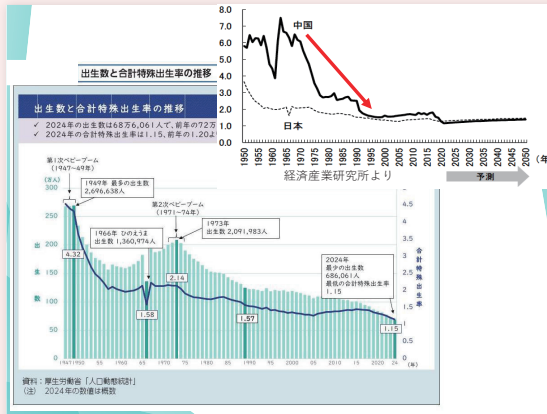
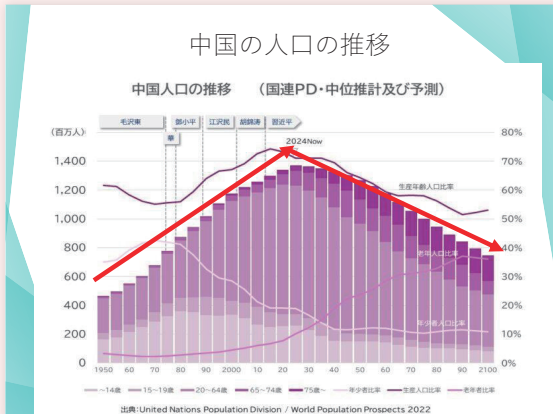
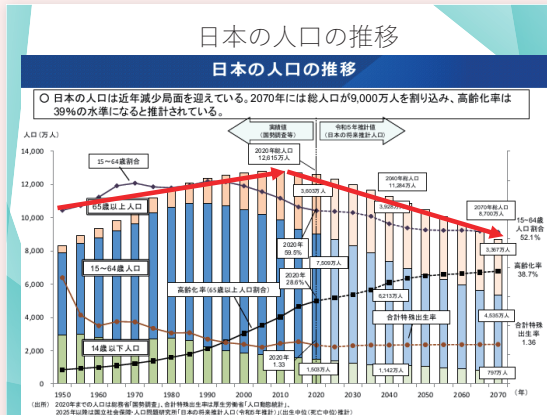
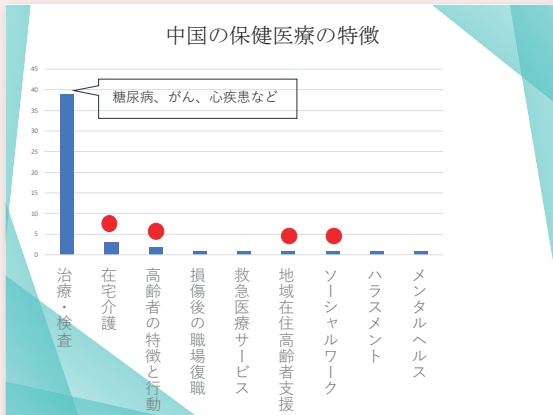
(R1) 都市住民医療保険制度と新型農村合作医療制度を統合し、城鎮職工基本医療保険制度へ変更するが、2016年1月に開始から発表された。  
(R2) 多くの都市では既に統合されて都市住民医療保険制度の内容へと変更されているが、中央政府からの対応期間に関する要求がなく、いくつかの都市ではまだ分かれている状況。

(R3) (中華人民共和國2019年国民经济和社会发展统计公报)

項目	中国	日本
医師	3,590,846人 (2021年)	343,275人(2022年)
歯科医	60万人 (2022年)	105,267人(2022年)
保健師	5,630,000人 (2022年)	60,299人(2022年)
助産師	2,048,071人 (2023年)	38,063人(2022年)
看護師	5,019,422人 (2023年)	1,311,687人(2022年)
薬剤師	50万人 (2022年)	323,690人 (2022年)

人口千人に対する医療従事者数	中国	日本
医師数: OECD (2017年)	2.01	2.43
看護師数: OECD (2017年)	2.7	11.34
薬剤師数: OECD (2017年)	-	1.81

(出典) 厚生労働省、グローバルノート <https://theworldict.com/rankings/doctors/>







# 東野圭吾『悪意』の人物描写 PPT

黒龍江東方学院 劉 佳寧

## 東野圭吾『悪意』の人物描写

2591106 劉佳寧

### 内容と目的

1. 推理小説の定義
2. 『悪意』の推理特徴
  - 2-1) 推理構造の柔軟性
  - 2-2) 叙述視点の多様性
  - 2-3) 推理結果の前置性
3. 結語



### 東野圭吾とは

東野圭吾は、現代日本を代表する推理小説作家の一人である。  
本格推理の論理的構成を基盤としながら、人間心理や社会問題を重視する作風で知られている。

彼の作品は、単なる謎解きにとどまらず、登場人物の感情や内面に深く踏み込む点に特徴がある。  
特に、嫉妬や劣等感、善悪の揺らぎといった人間の複雑な心理を、緻密な構成の中で描き出している。

東野圭吾は、本格推理と社会派推理を融合させた\*\*「写実本格派」\*\*とも言える独自の作風を確立し、推理小説を娯楽性と文学性を併せ持つジャンルへと発展させた作家である。

### 1. 推理小説の定義

推理小説とは、事件の謎を論理的に解明する過程を中心としながら、読者に知的緊張と推理的思考を促す文学ジャンルである。

日本においては、戦前の探偵小説を経て、戦後に本格推理・社会派推理が発展し、1960～70年代には第三の黄金期を迎えた。

この時期以降、推理小説は単なる謎解きにとどまらず、人間心理や社会問題を描く文学としての性格を強めていく。

### 2. 『悪意』の推理特徴

東野圭吾『悪意』は、従来の本格推理の枠組みを踏まえつつ、人物心理の描写を中心に据えた作品である。

本作では、犯人探しよりも動機の解明が重視され、叙述構造そのものが読者の認識を描き出す装置として機能している。

その結果、推理と人物描写が強く結びついた構成が成立している。



#### 2-1) 推理構造の柔軟性

『悪意』では、野々口修の手記と加賀恭一郎の捜査記録という二つの異なる叙述が交互に配置されている。

この構造により、読者は一つの視点に固定されることなく、物語の理解を何度も更新することを求められる。

推理は直線的に進行するのではなく、再解釈と修正を繰り返す柔軟な構造を持ち、人物の内面へと徐々に焦点が移っていく。

野々口修の「手記」と加賀恭一郎の「捜査記録」が交互に配置される

- 前半は野々口の一人称叙述により、読者は彼を「無実の人物」として受け取りやすい

#### 要点:

「ふだんから私は、大した用もなく日暮の家に行くことがあった……」（講談社文庫P7以下同じ）

→ 日常的な語り方が不自然さを覆い隠す

- 後半で加賀の捜査視点が導入され、野々口の語りは検証・再評価される
- 読者は既存の理解を修正し、推理は再解釈を前提とする柔軟な構造として成立する

#### 2-2) 叙述視点の多様性

本作の大きな特徴は、複数の一人称叙述が重ねられている点にある。

野々口修の語りは主観的で感情的であり、読者に同情や共感を抱かせる一方で、情報の信頼性には常に疑問が残る。

これに対し、加賀恭一郎の視点は客観的かつ分析的であり、野々口の語りを検証し、相対化する役割を担っている。



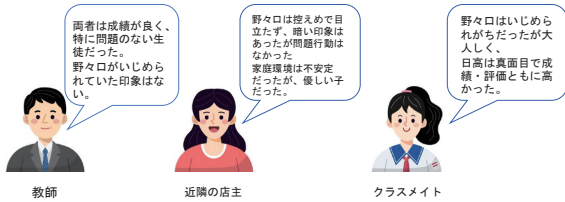
### ① 要点

- 冒頭から読者に日高の悪いイメージを定着させる  
〔「俺がやったんだよ。番タンゴを腹に仕込んでおいたんだ。」(p15)〕
- 野々口修の一人称叙述  
→ 主観的・感情的で信頼しやすい語り
- 読者は野々口に同情し、語りを事実として受け取る
- 第二章で加賀恭一郎の視点が登場  
→ 語りを検証・反証する役割
- 時間の矛盾が指摘され、語りの信頼性が崩れる
- 複数視点の交替により、多層的・欺瞞的な叙述構造が形成される

### ② 叙述視点の拡張 — 「過去の章」

- 加賀は刑事としての観察と推理に基づき、野々口の手記を無批判には受け入れない
- 過去の出来事を検証するため、詳細な再調査を開始する
- 「過去の章」では、野々口と日高の少年時代が11人の一人称証言によって再構成される
- 証言者は、同級生・教師・近隣住民・親族など多岐にわたる

### 証言：



複数の証言は、野々口自身の語りを相対化し、過去の記憶の主観性と不確かさを浮き彫り

### 2-3) 推理結果の前置性

『悪意』では、物語の冒頭で犯人が明示されている。

この構成によって、読者の関心は「犯人の正体」から「犯行に至る心理的過程」へと移行する。

嫉妬、劣等感、比較による屈辱感といった感情が長い時間をかけて蓄積され、最終的に「悪意」として表出する過程が描かれている。

### 3. 結語

『悪意』は、柔軟な推理構造と多様な叙述視点をを用いることで、人物の内面に潜む悪意を立体的に描き出した作品である。

本作は、推理小説の形式を維持しながら、心理学としての深みを獲得しており、東野圭吾の「写実本格派」作風を代表する一作といえる。

### 参考文献

- [日] 東野圭吾『悪意』、講談社 2001年
- [日] 別冊宝島編集部、『僕たちの好きな東野圭吾』、宝島社、2009年
- [日] 『東野圭吾作家生活40周年実行委員会・東野圭吾公式ガイド 作家生活40周年ver.』講談社、2025
- [日] 『増補改訂新潮日本文学辞典』新潮社、1988.
- [中] 張浩『東野圭吾の推理小説における文化的ナラティブの研究』2022年5月
- [中] 倪捷『東野圭吾の社会派推理小説における特徴の研究』南京師範大学修士學位論文、(2020)
- [中] 茹鳳浦『東野圭吾の代表作『悪意』の評論』『新讀書（新聞談）』第101期、pp.76-77. (2021)
- [中] 申冬梅『東野圭吾の推理小説における創作上の特徴』《全民阅读》2019年第18期总第348期
- [中] 冯麗敏『東野圭吾の推理小説におけるナラティブの研究』2020年6月4日  
[1-4日]日本語の文献、[5-7中]中国の文献を表す。  
中国語の文献についてはタイトルを翻訳した。



# 中国の儺文化の日本への伝播と発展

PPT

黒龍江東方学院 梁 潤生



## 中国の儺文化の日本への伝播と発展

東アジア文化交流史における創造的適応のケーススタディ

### 本研究の視点と意義

**新視点**  
山口建治(2011)が提示した、唐風楽舞に依拠し、これまで日本独自の起源とされてきた御霊信仰が、実は中国の儺文化に由来する可能性を再確認する。

**言語学的アプローチ**  
「御霊(ゴリョウ)」の語源は、中国語の「五霊(ウーリン)」に由来する可能性を検討

**歴史学的検証**  
漢代以来の信仰の伝来と、**祭神社会**との融合過程を再確認する。

**研究の意義**

- 実証的研究** 文学と宗教学の両面から、儺文化の日本化という複雑な過程を立体的かつ多面的に検討する
- 理論的貢献** 東米文化の本土化における創造的適応のメカニズムを明らかにし、文化伝播の理論モデルを提示
- 現代的意義** グローバル化における文化遺産の保存と継承のモデルとして、東アジアに共通する文化的遺産の理解を深める

### 後漢時代の儺文化：儀礼の体系化

**『後漢書』礼儀志の記述**  
原文：  
先帝一日、大駕、御之遊苑。  
儺(年未の祭)の前日に、大駕(大規模な儀礼)を行い、**儺(御霊)を祀る**ことを「遊苑」と称した。

**儀礼の構成要素**  
● 方相氏：霊命司、儀仗、文と書  
● 童子：120人(10-12歳)、赤色の服、大鼓  
● 十二鼓：体毛に濡れ角が生えている  
● 役人：中門門、刀法操持  
方相氏率いる、120人の童子と十二鼓という大規模な儀礼へと発展

**大駕の儀礼構造**

- 準備段階** 方相氏率いる120人の童子を選出し、赤い帽子と黒い衣服を着せ、大鼓の音を奏せ始める
- 方相氏の登場** 童子の首を振り、儺の毛皮をかぶり、黒い帽子に赤い袋を掛け、鼓を手に持ち進む
- 十二鼓の登場** 十二鼓の童子が、体毛に濡れ角が生えた状態で登場する
- 夜間進行** 中門門が儀礼を進行させ、刀法操持が方相氏や童子を導いて途中の道徳を指示し立てる

**体系化の完成**  
明確な役割分担と階層構造を持つ「**御霊(ウーリン)**」祭祀として確立

**影響力の拡大**  
この大駕の儺礼形態が、後の**儺の大駕**となり、日本の**御霊式**の原型となった

### 儺文化の東伝と類似儀礼

**東アジア諸国における儺文化**  
中国の儺文化に類似した儺礼形態は、今日においても**日本**、**韓国**、**ベトナム**で確認できる。これらは中華文化が伝播し影響を与えたことの証明である。

**文化的意義**  
これらは中華文化が伝播し影響を与えたことを証明するのみならず、それらが異なる文化圏においても本土化と融合を果たしたことを示している。

**東アジアの文化的伝播**  
儺は東アジアに共通する文化的遺産として、国家間の地位を高めることができる。

**★特に顕著な事例：京都の部分祭**

実施場所	起源	内容	意義
平安神宮、西田神社など	中国時代の儺文化に由来	日本特有の御霊と融合	儺文化の発展として評価

### 追儺式の日本的変容

**時期と実施主体の変化**  
平安時代後期の追儺式は、**日本の神皇正統記**に記述され、実施時期が天武朝から(部分) (立春の前日)へと移行した。

**祭神の意義**  
皇から身への移行を伴った神聖化と儀式として定着

**なぜこのような変容が起ったのか?**

- 仏教等の影響** 仏教等の影響を受けたことに加え、神皇正統記という文化的背景も影響を与えた。
- 地域差の影響** 地域差の影響を受け、日本各地で異なる変容が生じた。

**祭神の歴史的背景**  
追儺式によって定着した追儺式は、**御霊(ウーリン)**と**御霊(ゴリョウ)**とを区別する。追儺式は、**御霊(ウーリン)**と**御霊(ゴリョウ)**とを区別する。追儺式は、**御霊(ウーリン)**と**御霊(ゴリョウ)**とを区別する。

**文化伝播の意義**  
このような変容を伴った追儺式は、中国の儺文化の発展にある核心を保持するとともに、**日本の独自性**を表現し、**東アジア文化交流史**に重要な役割を果たしている。

### 儺文化とは何か

**1 定義**  
儺文化は、**中国に起源を持つ複合的な儺礼文化**である。その中核には、**疫癘を禳送し、天下泰平と無疫息災を願う**という、人類に普遍的な強い願いが常に存在してきた。

**儺面具**  
儺文化の重要な視覚的要素であり、**悪鬼や疫癘を祓うための儀礼的道具**である。

**先行研究の概観**  
**主要**：日本の宮廷儀礼である「追儺式」は、中国唐代の大駕儺を継承している。  
**貢献**：儺文化東伝の基本的な枠組みを提示、日本の部分などの年中行事への発展経緯を明らかにした。

### 儺儀の誕生：宮廷儺と民間儺

**宮廷儺**  
『周礼』官官馬の記述  
方相氏、儺皮を蒙り、黄金四目を具し、文を執り書を揮ひ、時儺(儺)を執り、以て室を災りを禳る。  
● 実施主体：国家または王公が主催  
● 目的：空中の疫癘、疫病を禳送し、国家の平安を祈願  
● 特徴：高度に形式化された国家祭祀の一部

**民間儺**  
『周礼』郷党の記述  
郷人儺、儺面を戴り、儺皮を蒙り、以て室を災りを禳る。  
● 実施主体：村単位の共同体  
● 目的：村落の疫病伝染と疫病を祈願  
● 特徴：より原始的で地方に根ざった形態

**歴史的意義**  
少なくとも春秋時代(紀元前771年)には、すでに宮廷儺は国家祭祀の一部として、疫病を禳送する目的で、上から夏・秋・冬にかけて、国家祭祀として鬼神を中心とする民間信仰として行われていたことが確認できる。  
宮廷儺は、**儺の大駕**として制度化された。



方相氏(北宋・蘇軾義撰『新定三礼图』より引用)

### 日本における儺式の起源

**『續日本紀』の記述**  
原文(皇極三事)  
皇年、天下結儺疫癘、百姓多死。  
始作土牛大儺。  
この年、天下の國に疫癘流行し、皇極三事に記述されている。その際、**土牛大儺**が行われ、疫病を禳送する目的で、**儺の大駕**の原型として行われた。

**歴史的文脈**  
年代  
**706年**  
背景  
全田村を疫癘の流行

**実地内容**  
● 土牛の制作：疫病を禳送する目的の儀礼  
● 儺の大駕：儺の大駕の原型に類似した儀礼

**追儺式の起源としての意義**  
日本追儺式の起源  
この年に行われた土牛大儺が、後の日本追儺式において、**儺の大駕**の原型として行われた。その形式は中国の唐代から漢唐時代にかけて行われていた追儺式に由来している。

### 御霊信仰の中国起源説

**1 従来の見方**  
日本独自の信仰とされてきた  
御霊信仰は、疫癘や疫病の禳送を目的とした民間信仰と見られてきた。その起源は不明である。この説は、**御霊(ウーリン)**と**御霊(ゴリョウ)**とを区別する。御霊信仰は、**御霊(ウーリン)**と**御霊(ゴリョウ)**とを区別する。

**山口建治の新説**  
御霊信仰の中国起源説を打ち出した。御霊信仰を禳送する新たな説を提唱し、**御霊(ウーリン)**と**御霊(ゴリョウ)**とを区別する。御霊信仰は、**御霊(ウーリン)**と**御霊(ゴリョウ)**とを区別する。

**Q 言語学的検討：『五霊(ウーリン)』から『御霊(ゴリョウ)』へ**  
**従来の見方**  
御霊の「霊」に「霊」を加えたと認められてきた。しかし、これでは語源の追及が困難である。  
**山口建治(2011)の新説**  
中国語の「五霊(ウーリン)」に由来する可能性が高まっている。これは中国語の「御霊(ウーリン)」と「御霊(ゴリョウ)」を区別する。



## 編集後記

2025年4月13日から10月13日までの184日間、大阪市の夢洲にて「2025年日本国際博覧会（通称：大阪・関西万博）」が開催され、来場者は2900万人を超え、多くの方々が来日されました。本学リハビリテーション学科もパビリオンへ出展し、学生や教員が様々な国の来場者と交流することができました。また、2026年2月6日から2月22日には冬季オリンピック、3月4日～3月15日は冬季パラリンピックがイタリアで開催され、多くの日本の選手が素晴らしい活躍を見せてくれました。

今年度は本学でも5つの国際交流プログラムを実施することができました。そのうち3つのプログラムでは計18名の留学生を迎え、日本語の学習や自身の課題研究に取り組むとともに日本の文化を体験する機会を多く設けました。また、2つのプログラムでは計21名の本学学生が海外へ出向き、それぞれ専門とする分野の学習や施設の見学を行い、また現地の学生と交流しながら異文化を体験しました。多くの学生が初めての海外研修で、貴重な経験となりました。

2026年度は9月19日から10月4日までアジア競技大会、10月18日から10月24日までアジアパラ競技大会が愛知県を中心とした6都府県で開催され、アジア各国の方々が来日されます。この機会に国際交流をされてみてはいかがでしょうか？

さて、本誌は、今年度学生が国際交流の発表の際に使用したスライドや、学生の学び・経験・感想をまとめたものとなります。学生の国際交流にご支援・ご協力を頂きました皆様、本誌発刊にご協力いただきました皆様に深謝申し上げます。

社会・国際連携センターでは国際交流と併せて地域貢献に関する事業も実施しています。公開講座や近隣地域の行事への協力等で地域振興に努めるとともに、教員の教育研究活動を通じた社会貢献の情報等をお知らせする「奈良学園大学ニューズレター」の発行をしています。今後とも社会・国際連携センターの事業についてのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

社会・国際連携センター運営委員  
保健医療学部 講師

笹野 弘美

社会・国際連携センター発刊

〒631-8524 奈良市中登美ヶ丘3丁目15-1

Tel. 0742-93-5405

<http://www.naragakuen-u.jp>

